

2014年度

「学生による授業評価アンケート」
報告書

2014年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

立教大学

2015年 9月

はじめに

総長 吉岡 知哉

立教大学の授業評価アンケートの最大の特徴は、そこにフィードバックのプロセスが組み込まれていることにあります。1. 選択肢による定型的なアンケートに加え、「記述による評価」欄を設けて学生の直接的な意見を反映させていること、2. アンケート結果をただ集計するだけではなく、結果に対する個々の教員の所見を求めていること、3. 所見票を全学の学生・教職員に公開していること、そして4. 各学部ごとの総評が報告書の形でまとめられていること。授業評価アンケートの「進化」を生み出してきたのも、このフィードバックのメカニズムにほかなりません。

授業評価アンケートでは、基本的に「一教員一科目」という方針を取ってきました。もとよりこれは、このアンケートが教員の授業力向上のための一施策として始められたという事情を反映しています。授業評価アンケートは、教員による授業方法の自己チェックに資することを第一の目的としていたのです。

けれども同時に注目しておくべき点は、本アンケートが質問項目として、学生自身の授業への取り組み方、学生が授業から得ることができたものを問うていることです。このことは、「学生による授業評価アンケート」が、授業を、教員からの一方向的な知識や技術の伝達としてではなく、教員と学生との相互的な関係において捉えようとする考え方に支えられていることを示しています。

FDと略される概念が高等教育に導入された当初、一部ではパワーポイントをはじめとする情報ツールの使用能力など、問題を教員の技能評価に還元される傾向も見られました。そのような理解は、一方で学生を顧客と見なす教育＝サービス論と、他方で学生を製品とみなす品質管理論と適度に親和しつつ、一定の広がりを見たと言えるでしょうが、本学のFD推進は、そのような流行とは無縁に、授業を教育の一環として捉えるという基本姿勢を貫いてきたのです。

授業評価アンケートの「進化」は、授業を教育の一環として捉えるという、まさにこの点において生じています。それぞれの学部がアンケート対象となる科目を独自に選定するとともに、「学部等による設問」を別個に設定することを通じて、アンケートの結果は、個々の教員の自己チェックを超えて、授業やカリキュラムのあり方の検討のための素材を提供するという役割をも果たしつつあります。

言うまでもなく、授業は、教育という人間の営みの最前線にあって、生身の知性が激しく接触する現場にほかなりません。それに対して授業評価アンケートの結果は常に過去に過ぎない。それにもかかわらず、否、それだからこそ、私たちはそこに表れた数字や言葉から、それらに還元されない何かのを読み取ろうとします。その努力が、授業そのものを活性化させていくに違いありません。

本報告書が、教職員はもとより多くの人々、とりわけ授業の最も重要な当事者である学生の皆さんに読まれることを期待しています。

目次

はじめに

1. 本学における「学生による授業評価アンケート」について	1
1-1 目的	1
1-2 「報告書」作成の基本的な考え方	2
1-3 「所見票」について	3
1-4 実施科目の選定方針	4
2. 授業評価アンケートの実施概要	7
2-1 実施方式	7
2-2 設問項目	7
2-3 各学部等の科目選定方針	11
2-4 実施科目数	12
2-5 実施期間	12
2-6 回答者数	13
2-7 「所見票」の公開	13
3. 科目担当者・学部等への集計結果のフィードバック	15
3-1 科目担当者	15
3-2 学部等	15
4. 学部等総評	21
4-1 文学部	22
4-2 経済学部	25
4-3 理学部	28
4-4 社会学部	31
4-5 法学部	33
4-6 経営学部	36
4-7 異文化コミュニケーション学部	39
4-8 観光学部	42
4-9 コミュニティ福祉学部	44
4-10 現代心理学部	48
4-11 全学共通カリキュラム	51
4-12 学校・社会教育講座	57
5. 2014年度のまとめと今後の展望	59
6. 集計データ（資料編）	61
6-1 回答者数・回答率	61
6-2 学部等別平均値	62
6-3 「グループ集計」科目一覧	74

1. 本学における「学生による授業評価アンケート」について

本学における授業評価アンケートは、2004年度から毎年実施しており、その実施目的は開始以来これまで変更しておらず、初年度である2004年度報告書に書かれている通りである。以下にそれを転載する。

1-1 目的

本学における全学規模の学生による授業評価アンケートは、2002年7月10日に総長に提出された「全学FD検討委員会答申」に始まる。その中で、本学にとっての最重要FD課題として次の3点が挙げられている。第一に「教員における授業力の向上」、第二に「カリキュラム編成の合理化」、第三に「成績評価の厳正化」である。そして、その中でも緊急性がもっともあるとされたのが第一の課題であり、その中で「授業力向上に向けての具体策」のひとつとして挙げられていたのが「学生による授業評価の制度的実施」である。それを受けて、2002年12月18日付け文書「FDについて—学生による教育評価アンケートの2003年度実施に当たって—」の中で総長は、敢えて「教育評価」という言葉を用い、「個々の科目の授業やその担当教員への評価をこえて、広く本学の教育について、学生の評価を参照したい」と述べ、「学生による教育評価アンケート」をできる限り早期に実施したいとの方針を明らかにした。

それを受けて直後の2002年12月21日には早くも全学教務委員会FD専門部会の第1回部会が招集され、年度をまたいで検討が続けられた。その過程で、2003年度実施は見送られ2004年度実施を目標とすること、施設その他の教育条件一般を問うアンケートの前に、授業そのものに目標を絞って問うことなどの合意が形成され、「学生による授業評価アンケート」を行うことが決まった。そして、具体的アンケート項目作成作業が開始され、他大学のものをも参照しつつも、三つの独自案にまとまってゆき、並行して行われていたアンケートの目的や実際の実施方法などの検討結果とも連動しながら、最終的にひとつの案に集約されていった。その結果は部長会に報告され、了承を得て、その後、各学部教授会とのやり取りがあり、2003年の秋に2004年度前期から「学生による授業評価アンケート」を実施することが正式に決定した。そして、2004年度4月から「学生による授業評価アンケート実施委員会」が立ち上げられ、前期と後期に実施された。

その実施の目的は、部会における議論の結果、以下の点にあると考えられるにいたった。

- ① 教員が自らの授業改善を目指す自己研修の資料を得る。
- ② 教員同士が授業に関して相互研修をおこなう機会を提供する。
- ③ 学生の学習姿勢を知るための資料とする。
- ④ 学生の授業への期待のありかを知る資料を得る。
- ⑤ 学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起する。
- ⑥ 学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る。
- ⑦ 大学としての教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る。

以上である。

要するに、本学の「学生による授業評価アンケート」は端的に言って、個々の教員による授業を、学生がより充実して学習を進め大学としての教育力が今より一層効果的に機能

することを旨として改善し、その結果として学部・学科としての教育力をも増進することを唯一の目的とする、ということである。そうして、学生をも巻き込んで、本学が知的に活発で、創造性に富み、常に先進的に新しい知を発信し、それに基づく生き方を常に提案し続ける力を保持することができるようになることを最終目的とする。

それに対して、場合によっては教員の活力を削ぐことになりかねない教員管理の視点は厳しく排除される。大学は教職員と学生が相互に自己管理することを前提に、自由に精神活動をおこなう場である。特定の目的のために教職員ならびに学生を管理し、特定の方向へ向けるべく力を加えることは、大学本来の知的創造力を失わせ、ひいては大学が本来持っているはずの社会的役割を放棄し、その負託に答えられなくなることを意味する。その意味で、この「学生による授業評価アンケート」結果のデータは特定の意図を持って処理され、一律の基準の下に評価されることはない。それゆえに、集計データの統計的処理はアンケート対象になった個々の教員に任されることになった。それが所見票に表現されるのである。

このアンケートは大学としての教育力向上を目的としておこなわれるので、学生の自覚を促すことも期待されている。そのことは、一朝一夕に実現させることは難しいかもしれないが、学生たちの評価アンケート結果に対して、各教員がそれぞれの学問的見識を持って所見票で答え、実際の授業に反映する努力が積み重ねられることによって、徐々に現実化してゆくであろう。現在の大学では学生の自主的活動が必ずしも本来期待されているほど十分でなく、大学生の学校生徒化が進んでいると一般に言われている。その中で、学生の主体的参加が教員との関係を変えるきっかけになることを直接に経験することで、学生の姿勢が変化することを期待したい。

さらに、アンケート結果、所見票が公表されることにより、教職員相互間、あるいは教員と学生との間で切磋琢磨する風潮が広まれば、大学全体として、個々の学問研究と教育の活動に根ざした種々の改善が期待される。カリキュラムはもちろん、組織の運営体制や施設なども、このアンケートを手がかりにその評価の俎上に載せられることになってゆくであろう。

この「学生による授業評価アンケート」が、大学の知的エネルギーを構成している教職員相互の関係や教職員と学生との関係、あるいは学生相互の関係などを揺り動かし、多様な観点から相互に力を及ぼしあう結果になることを、我々は心から期待したい。そして、そのことがやや動脈硬化が進行してきた大学という組織にも再び熱い血を通わせ、教職員も学生も本学に集うことこそがその熱い血の拍動を生み、学問に触れることが楽しくて仕方がないという状況を生み出すことを心から願う。

1-2 「報告書」作成の基本的な考え方

「学生による授業評価アンケート」は調査である限りその結果がまとめられなければならない。我々はそれを報告書という形で世に問う。この報告書はアンケート対象になった個々の授業が1-1で述べられた目的に沿って学生によって評価された結果を総体として、学部・学科ごとに、そして大学全体として、その教育力を評価し、成果の上がっていることに関してはその成果の意味を明らかにし、さらにその成功を維持するための方策を考え、改善が必要なことに関しては、その原因を究明し、その克服のための方法を構築する。そ

して次回のアンケートにその改善努力の成果を問う。

この報告書の構成は以下のとおりになっている。

まず、(1)すでに述べたとおりこのアンケートの目的を明らかにする。その次に、(2)その目的に沿ったアンケート実施の概要を報告する。その上で、(3)統計処理上の技術的方針について、我々の考え方を明示し、データの性格を規定し、将来の調査をも視野に入れた分析方針を提示する。そして、(4)全学的な総評をおこなう。最後に(5)学部やその他の教育組織ごとの総評をまとめる。以上である。

この報告書はあくまで1-1のアンケートの目的に謳われている⑥学部・学科としてのカリキュラムの有効性を測定するための資料、および⑦大学としての教育力向上に必要な方針を立てるための資料を提供するためにおこなわれる。したがって、この報告書には個々の授業やその担当者、あるいはある学科の科目として特定できるような記述は記載されない。

それと同時に、この作業は全体としての③学生の学習姿勢を知るための資料、および④学生の授業への期待のありかを知る資料を得ることにつながる。授業に参加する学生たち自身の勉強に対する姿勢もアンケート項目に入っているため、それらについてはこの報告書の中で、各所で触れられることになるだろう。

これらの目的達成を検証することを狙い、我々は報告書を作成する。ちなみに目的の①と②は次に述べられる所見票に示されるだろう。⑤学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起するという点については、この報告書や同時に作成される所見票（とその集成である所見集）に示されるのではなく、今後おこなわれる将来の「学生による授業評価アンケート」にその成果が示されることになるだろう。

1-3 「所見票」について

個々の科目のアンケート結果は、同じ科目の将来の開講の際に生かされるはずである。しかし、一方ではアンケートに答えた学生たちには、将来の授業では直接的にフィードバックすることはできない。そこで、個々の科目のアンケート結果についても、何らかの形で少なくとも当該学生たちには公開される必要がある、と我々委員会は考えた。その際には、単純にアンケート項目の集計結果だけを公開する方法と、それに対する教員の所見をも添えて公開する方法が考えられる。

我々は個々の科目担当者に、自分の科目についての自己点検・評価という意味でアンケート結果のデータを読んでもらい、「授業評価に対する担当教員の所見」、「自由記述欄に対する担当教員の所見」、「改善に向けた今後の方針」を書いてもらうこととした。この3つの教員記述にアンケートのすべての項目についてその結果を帯グラフに表したデータを付したものを「所見票」と称した (p.6 参照)。そして、この所見票を学生に公開することにした。

所見票を書くことはアンケート対象教員にとって負担にはなる。しかし、我々は敢えて対象となった教員全員に所見票作成を依頼した。なぜならば、自分の授業についての学生による評価が出たならば、それについての対処を明確に行い、アンケートに協力してくれた学生たちに直接回答することも、授業担当者である教員の義務だと、我々は考えたからである。所見票はそのすべてが1冊にまとめられて所見集とされ、学生に対して学内で公

開されることになる。

所見票の狙いは以下の点にある。

- ① 教員がアンケート結果についてそれを直視し、自らの見解を発表する場を与える。
- ② 学内で公表されることによって、学生に直接回答する機会を与える。
- ③ アンケートに含まれる自由記述についてはデータ化できないので、教員の直接的コメントを通してその内容を明らかにすることを求める。
- ④ 改善に向けた明確な決意と工夫を書くことにより、次回アンケートとの比較を行い易くし、具体的授業改善の実現を可能にする。

以上である。

①については、教員側にも、もし学生からいわれのない不評や批判があった場合には、弁明する機会が欲しいとの声もあった。また、所見票を書けば、アンケート結果をつぶさに直視し、それに向き合って、自分に取り入れる契機とすることができる。さらに、データの多様な集計を当該教員に任せ、教員の必要に応じた分析を行い、納得の行く分析結果を出してもらうことにも意を注いだ。所見票はその結果を発表する場でもある。

②については、学生に対する直接回答であることを重視し、教員が自らの見解を自由に率直に表明しやすくするという趣旨で、公開は学内に限り、学生の便宜を考えて図書館に配置することにした。

③については、自由記述が単純にデータ化できないため、結果すべてを所見票に載せることはできない。また、記述内容によっては書き手が特定される場合もある。そこで、それを読んだ教員の責任でまとめてもらうことにして、教員所見にそのための欄を設けた。

④については、これを書くことでこのアンケートの目的で指摘された教員の自己研修を促すことになる。また、所見集が学内で公開されることから、学生以外にも同僚教員の目に触れる機会もあり、相互研修にもなることが期待される。

以上、所見票はこのようなことを期待して作られたのである。

(以上、2004年度報告書より転載)

1-4 実施科目の選定方針

本学における「学生による授業評価アンケート」は2004年度にスタートし、2006年度までの当初3年間は「講義科目を対象に1教員1科目」の原則で実施した。これにより、教員個々人の意識が高まり、授業改善の効果が上がったことは、各項目の数値が有意に上昇したことから明らかである。

2007年度には、スタート時に確認された目的のうち、「学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る」「大学として教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る」に比重を移し、実施対象科目に一部の演習科目を加えた上で、各学部・学科等の必要性により科目を選定する方式に切りかえた。2008年度、2009年度はこの方針を踏襲して実施した。

一方で、授業評価アンケート開始当初から、アンケートは単年度ごとにその目的と実施内容を検討・決定するのではなく、数年度単位の中期的な計画に基づいて展開する必要性が指摘されており、その策定に向けて、継続的に議論を行ってきた。

2006年度には、「1教員1科目の原則による実施は、教員個々人の意識を高め、教員全員が自らの自己研修の資料を得る観点から、少なくとも数年に一度は必要である」との全学的合意がなされた（2007年1月25日、部長会）。その後、他大学の実施状況調査を行うとともに、全学教務委員会および教育改革推進会議での学部等からの意見収集ならびに協議を経て、2009年度の教育改革推進会議（2009年11月19日）において、2010年度以降の基本方針を以下のとおり決定した。

- ① 授業評価アンケートは毎年実施する。
- ② 「1教員1科目」の原則による実施は、3年に一度とする。
- ③ ②以外の年度は、「学部等の必要性に応じた選定」により実施する。

基本方針決定以降の、科目選定方針は以下の通りである。2010年度は定められた基本方針に拠って、実施する初年度となり、上記②の「1教員1科目」の原則により実施した。

- ・2010、2013年度：「1教員1科目」
- ・2011、2012、2014年度：「学部等の必要性に応じた選定」

なお、2014年度の各学部等における科目選定方針については、「2-3 各学部等の科目選定方針（p.11）」を参照されたい。

2014年度春学期 立教大学「学生による授業評価アンケート」所見票

科目コード JHK01 科目名 授業評価01 開講曜日 土 開講時間 4 担当者 立教 太郎 教室 N212 履修者数 60 回答数 56

単純集計結果 (5:大いにそう思う, 4:そう思う, 3:どちらともいえない, 2:あまりそう思わない, 1:そう思わない)

5	4	3	2	1	無回答*	エラー

*注-7)、8)は「該当しない」も含む

授業評価に対する担当教員の所見

授業評価に対する担当教員の所見

- I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。
- 1) 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上 4:70~89% 3:50~69% 2:30~49% 1:30%未満)
 - 2) この授業に積極的に参加した
 - 3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた
 - 4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした
 - 5) シラバス (履修事項の講義内容) は受講に役立った
 - 6) この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (※知して、1週間に 5.3時間以上 4.7~3.8時間 3.1~2.8時間 2.1時間未満 1.0時間)

記述による評価に対する担当教員の所見

記述による評価に対する担当教員の所見

- II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。
- 1) 聞きやすい話し方だった
 - 2) 各回の授業内容の量が適切だった
 - 3) 各回の授業のねらいは明確だった
 - 4) 各回の授業内容は明確だった
 - 5) 十分な静肅性が保たれた
 - 6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった
 - 7) 板書のしかたが適切だった
 - 8) 映像視覚教材 (パワーポイント、ビデオなど) の使用が効果的だった
 - 9) 教員は授業の準備を周到に行っていた

改善に向けた今後の方針

改善に向けた今後の方針

- III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと感じますか。
- 1) 自分にとって新しい考え方・発想
 - 2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識
 - 3) 自分で調べ、考える姿勢
 - 4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味
- IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。
- 1) わかりやすい授業だった
 - 2) 授業全体の目標が明確だった
 - 3) 学問的興味をかきたてられた
 - 4) この授業を受けて満足した

2. 授業評価アンケートの実施概要

本報告書において、「学部等」とは、各学部、全学共通カリキュラムおよび学校・社会教育講座を示す。また、学部表示は科目開設学部を示しており、回答者（学生）の所属ではない。

2-1 実施方式

無記名式の質問紙によるアンケート方式にて実施した。また、アンケートの実施は授業時間内（授業開始から30分間、もしくは授業終了前の30分間）において行うこととした。

2-2 設問項目

5段階による評価方式の設問を23設問、記述による評価欄を2箇所の構成とした（pp. 8-9 参照）。設問の中には、必ずしも全科目には該当しないと思われるような設問もあるが、実施委員会としては、各設問項目の数値は、科目の特徴に照らして各科目担当者の裁量により解釈されるものとしている。

また、学部等によって独自の設問が設定できるよう、1学部あたり最大で7設問を設定できるようにした。2014年度は、文学部（2設問）、経済学部（6設問）、理学部（4設問）、観光学部（6設問）、現代心理学部（3設問）、全学共通カリキュラム（4設問）が学部設問項目を設定した（p.10 参照）。

2014年度立教大学授業評価アンケート

このアンケートは、立教大学の授業を改善し、さらに充実させることを目的に行われます。調査は無記名で行われ、回答の内容が成績評価に影響することはありません。大学を構成する重要な一員である学生として、みなさん自身が大学教育をより良いものにするという意識のもとに、率直かつ責任をもって回答してください。
立教大学

(注意) 1. マークにはHBの鉛筆を使うこと。 2. 太枠内に必要事項を記入の上マーク欄に正しくマークすること。 3. 誤りは消しゴムで完全に消すこと。
4. 指定以外のところには書きこまないこと。 5. 折りまげたり汚したりしないこと。

指示に従って「科目コード」、「学部」、「学科」、「学年」をマークしてください。

科目コード/Course No.	本学学部生 (学部・学科は学生番号の3・4桁目のアルファベット)
(A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I) (J) (K) (L) (M)	学部 (A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I)
(N) (O) (P) (Q) (R) (S) (T) (U) (V) (W) (X) (Y) (Z)	学科 (A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I)
(A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I) (J) (K) (L) (M)	(M) (N) (S) (T) (U)
(N) (O) (P) (Q) (R) (S) (T) (U) (V) (W) (X) (Y) (Z)	学年 ① ② ③ ④
① ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	本学学部生以外
① ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	特別外国人学生 (Special International Students) (特)
① ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	特別聴講学生 (f-Campus、立教女学院短大など) (聴)
	上記以外 (本学大学院生、科目等履修生など) (他)

以下の項目に対して、あなたにとって5段階のどの評価であるか、〔評価欄〕にマークしてください。

5：大いにそう思う 4：そう思う 3：どちらともいえない 2：あまりそう思わない 1：そう思わない

〔評価欄〕

I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。		
1) 授業全体を通じての出席率 (次の中から選んでマークしてください) 5:90%以上 4:70%~89% 3:50%~69% 2:30%~49% 1:30%未満		⑤ ④ ③ ② ①
2) この授業に積極的に参加した		⑤ ④ ③ ② ①
3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた		⑤ ④ ③ ② ①
4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした		⑤ ④ ③ ② ①
5) シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った		⑤ ④ ③ ② ①
6) この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (次の中から選んでマークしてください) 平均して、1週間に 5:3時間以上 4:2~3時間 3:1~2時間 2:1時間未満 1:0時間		⑤ ④ ③ ② ①
II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。		
1) 聞きやすい話し方だった		⑤ ④ ③ ② ①
2) 各回の授業内容の量が適切だった		⑤ ④ ③ ② ①
3) 各回の授業のねらいは明確だった		⑤ ④ ③ ② ①
4) 各回の授業内容は明確だった		⑤ ④ ③ ② ①
5) 十分な静粛性が保たれた		⑤ ④ ③ ② ①
6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった		⑤ ④ ③ ② ①
7) 板書のしかたが適切だった	該当しない (9)	⑤ ④ ③ ② ①
8) 映像視覚教材 (パワーポイント、ビデオなど) の使用が効果的だった	該当しない (9)	⑤ ④ ③ ② ①
9) 教員は授業の準備を周到に行っていた		⑤ ④ ③ ② ①
III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。		
1) 自分にとって新しい考え方・発想		⑤ ④ ③ ② ①
2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識		⑤ ④ ③ ② ①
3) 自分で調べ、考える姿勢		⑤ ④ ③ ② ①
4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味		⑤ ④ ③ ② ①
IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。		
1) わかりやすい授業だった		⑤ ④ ③ ② ①
2) 授業全体の目標が明確だった		⑤ ④ ③ ② ①
3) 学問的興味をかきたてられた		⑤ ④ ③ ② ①
4) この授業を受けて満足した		⑤ ④ ③ ② ①

※裏面にも設問がありますので、裏面も記入してください。

Ⅴ. 学部等による設問

なし

※ 独自の設問を設定した学部は、その設問が記載される（次ページ参照のこと）。

Ⅵ. 記述による評価

みなさん自身が授業をより良いものにするという意識のもとに、率直かつ責任をもって記入してください。
みなさんの回答は教員が読み、授業の参考にします。無責任な誹謗や中傷は避け、真摯な態度で回答してください。

1) この授業で良いと思った点があれば書いてください。

<hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/>

2) この授業で改善すべき点だと思った点があれば書いてください。

<hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/>

ご協力ありがとうございました

V. 学部等による設問

文学部

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった
- 2) この授業の受講者数は適切だった

経済学部

- 1) (全科目共通設問) 教室の規模と設備は適切であった
- 2) (基礎ゼミナール1) 経済文献を読む力がついた
- 3) (基礎ゼミナール1) レジюмеやレポート作成の力がついた
- 4) (情報処理系科目※) 表計算ソフト (Excel) の応用力が身についた
- 5) (情報処理系科目※) Power Point でプレゼンテーション資料を作成する力が身についた
- 6) (情報処理系科目※) WEB 上から経済資料・統計資料を入手する力が身についた

※情報処理系科目とは、以下の科目をさす

情報処理入門、経済情報処理 A、政策情報処理 A、財務情報処理 A

理学部

- 1) シラバスに沿って授業が行われた
- 2) 教員は質問・疑問に対し積極的に答えてくれた
- 3) (1年次春学期必修科目のみ) 教員は高校までの授業スタイルとの違いを考慮して授業展開をしてくれた
- 4) (必修科目のみ) 授業で困った際に、練習問題を解き合う等で学生同士が共同して解決策をとった

観光学部

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった
- 2) この授業の受講者数は適切だった
- 3) この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった
- 4) わたしは、この授業を通じて、現代社会における観光の重要性を認識した
- 5) わたしは、この授業を通じて、観光関連の仕事に興味をおぼえた
- 6) わたしは、この授業を通じて、観光を学ぶことにより興味がわいた

現代心理学部

- 1) この授業の受講者数は適切だった
- 2) この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった
- 3) 現代心理学部の教育研究設備に満足している

全学共通カリキュラム

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった
- 2) この授業の受講者数は適切だった
- 3) この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった
- 4) この授業の登録方法 (次の中から選んでマークしてください)
⑤ 1次抽選登録 ④ 2次抽選登録 ③科目コード登録 ②その他 ①覚えていない

2-3 各学部等の科目選定方針

実施対象科目は、これまで通り、学部科目（全学共通カリキュラムおよび学校・社会教育講座を含む）のうち、専門演習、実験、集中や実技を伴う科目、全学共通カリキュラム言語科目を除外した科目とした。

2014年度は、基本方針により「学部等の必要性に応じた選定」により実施した（詳細はp.5参照）。各学部等の選定方針は、下表の通り。

学部等	科目選定方針
文学部	(1) 各学科・専修の導入教育（初年次教育）科目 ①1年次必修科目 ②1年次で履修可能な科目 ③2年次必修科目 ④2年次で自動登録となる科目 (2) 文学部基幹科目 (3) 各学科・専修で必要と認める科目
経済学部	(1) 「講義科目1教員1科目」の調査は実施しない (2) 本年度については原則春学期に実施する (3) 共通シラバスを用い、授業の目的及び内容にある程度の共通性があり、複数コマ開講されている科目及び積み上げ方式の1年次科目（それに直接接続する科目を含める場合もある）についてアンケートを実施する
理学部	(1) 数学科では新カリキュラム（2010年度より移行）の有効性を検証するために、新カリキュラムにおける新規に設計した必修科目・選択必修科目について、定観測（毎年、同じ科目で調査）を行う (2) 物理学科では原則として複数担当科目以外の全ての講義科目を選定する。経年変化を見るために、なるべく毎年同じ科目について、アンケートを実施する。ただし、講究は受講者が少ない場合が多いので、担当者の希望がある場合のみ実施することにする (3) 化学科では原則として、必修講義科目ならびに複数教員担当科目をのぞき選択講義科目の経年変化を調査するために、毎年同じ科目についてアンケートを実施する (4) 生命理学科では授業評価に対する改善策の具体的効果を継続的に検証するために、2014年度も同じ科目についてアンケートを実施する (5) 共通教育科目では独自にアンケートを行うため実施しない
社会学部	(1) 必修科目はすべて実施する (2) 「講義科目」については、科目の種類を問わず、なるべく「年間1教員1科目」となるように選定作業を行う (3) 産業関係学科の科目は実施しない
法学部	(1) 3年に1回全教員（専任・兼任）について、1教員1科目を原則に行う (2) (1)を行わない年度については、本学で初めて授業を開講する教員、およびアンケートの実施を希望する科目を対象に行う ※2014年度は(2)に該当する
経営学部	「演習」を除く全科目で実施する。ただし、科目特性を考慮して、独自にアンケートを実施する科目については、当該アンケートの実施対象に含めない
異文化コミュニケーション学部	必修科目の講義科目のうち学部が必要と考える、同一科目で複数コマ開講する科目および今年度新規開講科目
観光学部	(1) 原則として年間1教員1科目を対象とする (2) 専門演習、実験、実技を伴う科目は対象としない (3) 複数教員担当科目は対象としない (4) 集中講義は対象としない
コミュニティ福祉学部	(1) 1教員1科目以下の実施を原則とする (2) 資格科目を優先する (3) 演習科目は対象外とする (4) 昨年度実施科目を優先する
現代心理学部	(1) 学部専任教員が担当する「学部共通選択科目（旧カリ「総合展開科目」）」全科目 (2) 学部専任教員が担当する「初年次教育科目」 (3) 学部専任教員が担当する「講義科目」及び「共通シラバスにより展開される一部の科目」 なお、「演習科目」「実験科目」及び「複数教員担当科目」は、原則として実施対象としない
全学共通カリキュラム	本学で開講される全カリ立教A、領域別A、主題別Aの講義系科目、総合自由科目の全科目を対象とし、担当する1教員（専任・兼任）1科目の実施とする
学校・社会教育講座	(1) 履修者5名以下が予想される科目は対象外とする (2) 教職課程は「講義科目1教員1科目」を原則として実施する (3) 他課程は、今年度、特に授業評価を要する重点的科目に限って、アンケート実施する

2-4 実施科目数

実施科目数は春学期 611 科目、秋学期 506 科目、合計 1,117 科目であった。

実施予定科目数は、春学期 625 科目、秋学期 528 科目、合計 1,153 科目であったので、全学の実施率（実施科目数/実施予定科目数）は 96.87%（1,117/1,153）、所見票提出率は 83.08%（928/1,117）となった。

科目開設学部等	実施 予定 科目数	実施学期内訳		実施 科目数	実施学期内訳		所見票 提出数	実施学期内訳	
		春学期	秋学期		春学期	秋学期		春学期	秋学期
文 学 部	143	81	62	137	80	57	113	63	50
経 済 学 部	67	52	15	66	51	15	62	47	15
理 学 部	98	47	51	97	47	50	89	42	47
社 会 学 部	118	64	54	115	63	52	99	52	47
法 学 部	14	7	7	14	7	7	13	6	7
経 営 学 部	113	59	54	106	55	51	69	34	35
異文化コミュニケーション学部	8	7	1	8	7	1	6	6	0
観 光 学 部	89	50	39	86	48	38	67	38	29
コミュニティ福祉学部	113	58	55	109	55	54	93	46	47
現 代 心 理 学 部	30	12	18	28	12	16	15	6	9
全学共通カリキュラム	303	149	154	295	147	148	251	119	132
学校・社会教育講座	57	39	18	56	39	17	51	35	16
合 計	1,153	625	528	1,117	611	506	928	494	434

2-5 実施期間

可能な限り授業が進行した時期に実施することが望ましいとの考えから、2012 年度より最終授業週も授業評価アンケートの実施期間とした。アンケートの実施は第 1 週を原則とし、最終授業週は予備週とした。

春学期：2014 年 7 月 7 日（月）～7 月 19 日（土）

秋学期：2014 年 12 月 22 日（月）、2015 年 1 月 9 日（金）～1 月 22 日（木）

2-6 回答者数

アンケート実施科目の延べ回答者数を、科目の開設学部等別に下表にまとめた。参考のために、履修者数も表に載せた。

科目開設学部等	春学期		秋学期		合 計	
	履修者数	回答者数	履修者数	回答者数	履修者数	回答者数
文 学 部	5,852	3,950	3,906	2,827	9,758	6,777
経 済 学 部	1,903	1,633	1,611	984	3,514	2,617
理 学 部	3,820	2,591	3,558	2,215	7,378	4,806
社 会 学 部	10,766	6,205	7,714	4,170	18,480	10,375
法 学 部	1,460	740	1,503	652	2,963	1,392
経 営 学 部	7,582	4,774	6,346	3,329	13,928	8,103
異文化コミュニケーション学部	266	239	126	117	392	356
観 光 学 部	6,184	3,975	5,111	3,275	11,295	7,250
コミュニティ福祉学部	5,348	3,573	6,204	3,850	11,552	7,423
現 代 心 理 学 部	2,225	1,539	2,427	1,118	4,652	2,657
全学共通カリキュラム	22,016	13,902	20,099	12,121	42,115	26,023
学校・社会教育講座	2,457	1,907	707	536	3,164	2,443
合 計	69,879	45,028	59,312	35,194	129,191	80,222

2-7 「所見票」の公開

所見票（科目別の集計結果および科目担当者による所見）は、WEB上で学生・教職員（兼任講師含む）に対し閲覧に供している。加えて、「所見集」としてまとめ、池袋図書館および新座図書館においても閲覧に供している。

3. 科目担当者・学部等への集計結果のフィードバック

3-1 科目担当者

担当科目の集計結果（下記①、②、③）をアンケート実施1~2ヶ月後に「所見票入力システム」上に掲載した。

- ①集計結果票（p.17 参照）
- ②「記述による評価」一覧票
- ③アンケート元データ

これを基に、科目担当者には所見票の執筆を依頼した。

3-2 学部等

以下の方針で、集計結果を提供した。

1) 集計の方針

- ①学部等によって科目選定方針が異なるため、集計・分析は学部等別に行い、全学での集計や学部等間の比較、昨年度との比較は行わない。
- ②学部等が独自に設定した基準でアンケート実施科目をグループ化し、科目間の比較や全体傾向を把握するグループ集計を実施する。グループ集計の実施の有無は学部の判断に委ねる。

2) 集計内容

①回答者数・回答率

アンケート回答者を学部等別、学年別に集計した。また、アンケート実施科目の延べ履修者数と延べ回答者数を集計し、学部等別に回答率を算出した。（資料編 p.61 参照）

②学部等別平均値

設問項目別に平均値を算出し、回答割合を帯グラフで示した。また、学科等別、授業規模別、学年別の平均値を算出した。（学部等別平均値は、資料編 pp.62-73）

なお、2013 年度より、アンケート設問項目の「I1)出席率」および「I6)授業時以外に学習した時間」については、以下の通り数値を置き換え算出している。

・ I1)出席率

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、
「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

・ I6)授業時以外に学習した時間

「5:3 時間以上」=3.5、「4:2-3 時間」=2.5、「3:1-2 時間」=1.5、
「2:1 時間未満」=0.5、「1:0 時間」=0

③設問項目間の相関

相関係数を学部等別、学科等別に算出した。学部等別の相関においては、IV総合評価、特にIV4「この授業を受けて満足した」を中心に、他の設問項目との関連をみた。

④グループ集計（実施学部のみ）

アンケート実施科目を学部等の指定によりグループ化し、設問ごとに回答割合を帯グラフで示した。また、設問項目別平均値をレーダーチャートと一覧表で示した。

（pp.18-19 参照）

学部等には、上記「2）集計内容」と、科目担当者が執筆した所見票を送付し、学部等総評の執筆を依頼した。

2014年度春学期 立教大学授業評価アンケート 集計結果票

科目コード	JHK01	開講曜日	土	担当者	立教 太郎	履修者数	60
科目名	授業評価01	開講時限	4	教室	N212	回答数	56

単純集計結果 (5:大いにそう思う, 4:そう思う, 3:どちらともいえない, 2:あまりそう思わない, 1:そう思わない)

5	4	3	2	1	無回答*	エラー	
回答者数、()内はパーセント							平均
							1から5の数字の平均

*II-7), 8)は「該当しない」も含む

I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上 4:70%~89% 3:50%~69% 2:30%~49% 1:30%未満)	36 (64%)	15 (27%)	4 (7%)	1 (2%)	0 (0%)	0	0	90.71	*1
2) この授業に積極的に参加した	16 (29%)	20 (36%)	14 (25%)	6 (11%)	0 (0%)	0	0	3.82	
3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	8 (14%)	14 (25%)	19 (34%)	9 (16%)	6 (11%)	0	0	3.16	
4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	7 (13%)	22 (39%)	14 (25%)	10 (18%)	3 (5%)	0	0	3.36	
5) シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った	16 (29%)	25 (45%)	12 (21%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	3.95	
6) この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (平均して、1週間に 5:3時間以上 4:2~3時間 3:1~2時間 2:1時間未満 1:0時間)	4 (7%)	3 (5%)	7 (13%)	17 (30%)	25 (45%)	0	0	0.72	*2

II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) 聞きやすい話し方だった	23 (41%)	23 (41%)	9 (16%)	1 (2%)	0 (0%)	0	0	4.21	
2) 各回の授業内容の量が適切だった	14 (25%)	30 (55%)	8 (15%)	3 (5%)	0 (0%)	0	1	4.00	
3) 各回の授業のねらいは明確だった	17 (30%)	23 (41%)	12 (21%)	2 (4%)	2 (4%)	0	0	3.91	
4) 各回の授業内容は明確だった	17 (30%)	26 (46%)	10 (18%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	4.00	
5) 十分な静肅性が保たれた	42 (75%)	13 (23%)	1 (2%)	0 (0%)	0 (0%)	0	0	4.73	
6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	19 (34%)	25 (45%)	8 (14%)	4 (7%)	0 (0%)	0	0	4.05	
7) 板書のしかたが適切だった	8 (18%)	14 (31%)	16 (36%)	5 (11%)	2 (4%)	6	5	3.47	(該当しない) (無回答)
8) 映像視覚教材 (パワーポイント、ビデオなど) の使用が効果的だった	6 (13%)	6 (13%)	26 (57%)	3 (7%)	5 (11%)	5	4	3.11	(該当しない) (無回答)
9) 教員は授業の準備を周到に行っていた	21 (38%)	19 (34%)	10 (18%)	6 (11%)	0 (0%)	0	0	3.98	

III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。

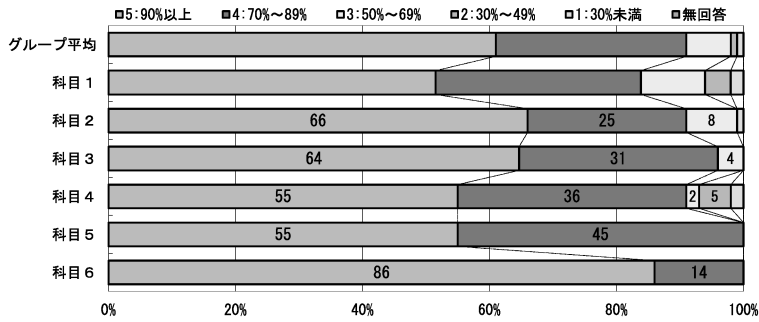
1) 自分にとって新しい考え方・発想	22 (39%)	20 (36%)	6 (11%)	8 (14%)	0 (0%)	0	0	4.00	
2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	22 (40%)	26 (47%)	4 (7%)	3 (5%)	0 (0%)	0	1	4.22	
3) 自分で調べ、考える姿勢	13 (23%)	21 (38%)	13 (23%)	8 (14%)	1 (2%)	0	0	3.66	
4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	25 (45%)	23 (42%)	6 (11%)	1 (2%)	0 (0%)	1	0	4.31	

IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) わかりやすい授業だった	25 (45%)	19 (34%)	8 (14%)	3 (5%)	1 (2%)	0	0	4.14	
2) 授業全体の目標が明確だった	22 (39%)	21 (38%)	10 (18%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	4.09	
3) 学問的興味をかきたてられた	27 (48%)	14 (25%)	12 (21%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	4.14	
4) この授業を受けて満足した	27 (48%)	15 (27%)	10 (18%)	3 (5%)	1 (2%)	0	0	4.14	

1) 設問別帯グラフ (5:大いにそう思う 4:そう思う 3:どちらともいえない 2:あまりそう思わない 1:そう思わない 9:該当しない(Ⅱ-7,Ⅱ-8のみ) 無回答)

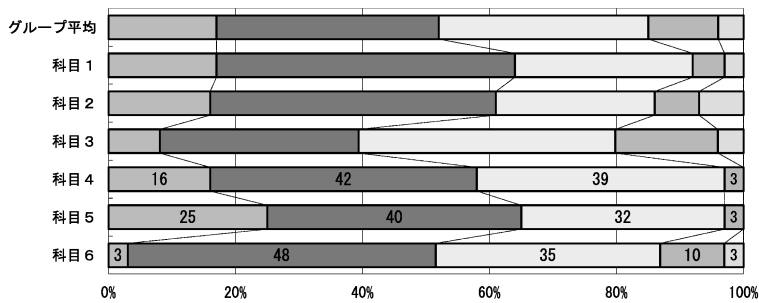
I-1 授業全体を通じての出席率



	回答者数 ^{*1}	平均 ^{*2}	無回答
グループ平均	113	94.87	-
科目 1	19	96.90	-
科目 2	15	96.00	-
科目 3	20	95.67	-
科目 4	21	97.87	-
科目 5	18	86.89	-
科目 6	20	92.22	-

*1「無回答」は除く
*2 I-1の平均値の算出方法は表紙に記載

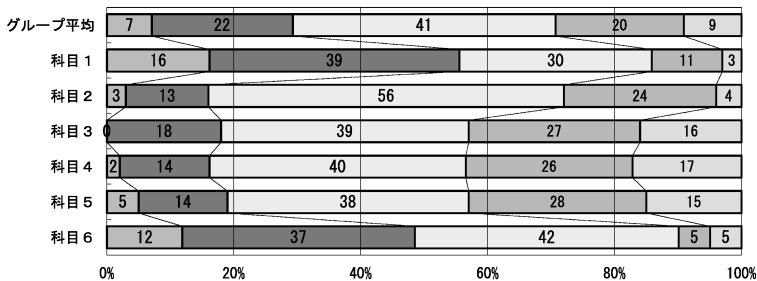
I-2 この授業に積極的に参加した



	回答者数*	平均	無回答
グループ平均	113	3.61	-
科目 1	18	3.72	-
科目 2	15	3.69	-
科目 3	20	3.20	-
科目 4	21	3.78	-
科目 5	18	3.90	-
科目 6	20	3.46	-

*「無回答」は除く

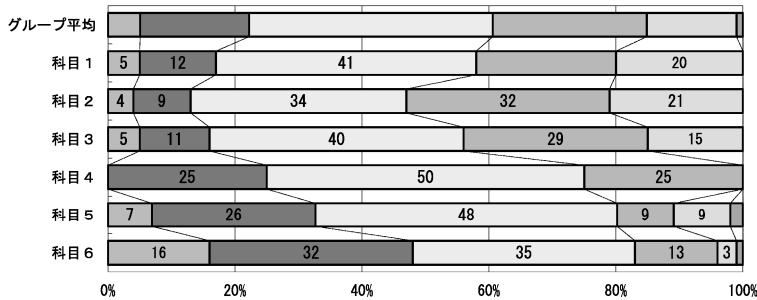
I-3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた



	回答者数*	平均	無回答
グループ平均	113	3.01	-
科目 1	19	3.58	-
科目 2	15	2.76	-
科目 3	20	2.65	-
科目 4	21	2.63	-
科目 5	18	2.93	-
科目 6	20	3.67	-

*「無回答」は除く

I-4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした



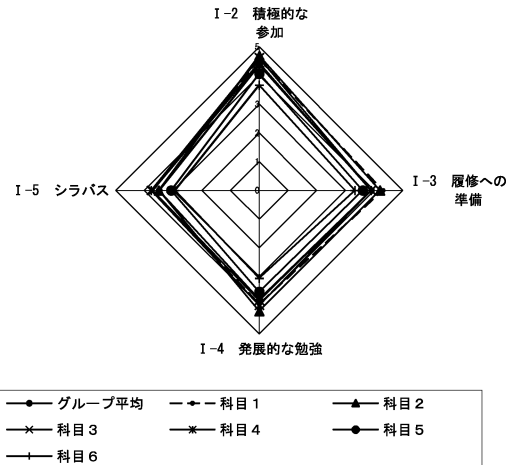
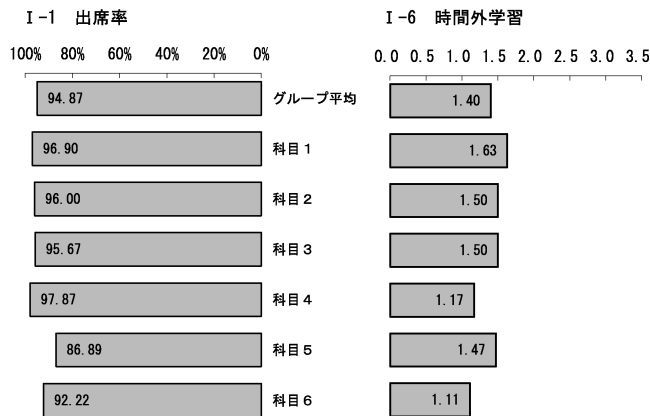
	回答者数*	平均	無回答
グループ平均	113	2.98	2
科目 1	19	2.60	-
科目 2	15	2.42	-
科目 3	20	2.67	-
科目 4	21	3.09	-
科目 5	18	3.12	1
科目 6	20	3.56	1

*「無回答」は除く

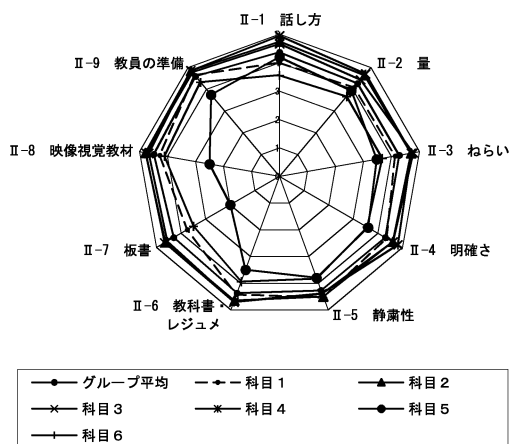
2) 平均値のレーダーチャート

(5:大いにそう思う 4:そう思う 3:どちらともいえない 2:あまりそう思わない 1:そう思わない)

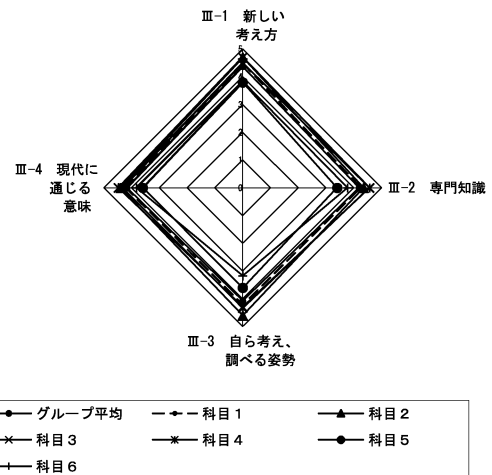
I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。



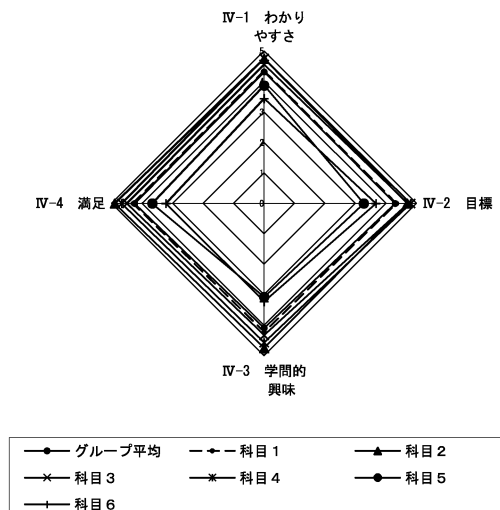
II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。



III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。



IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。



4. 学部等総評

学部等総評は、科目ごとの集計結果、各教員の執筆した所見票および学部全体の集計結果をもとに、下記を基本形として、各学部等が執筆した。

<構成の基本形>

1. 科目選定方針とねらい
2. 集計データにみられる結果のまとめ
3. 担当教員の所見票に対するまとめ（「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ、「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ、「改善に向けた今後の方針」のまとめ）
4. 学生からの意見（記述による評価）の集約（「肯定的評価として多い意見の集約」、「否定的評価として多い意見の集約」）
5. 今後の改善に向けて

2013年度より「I1) 出席率」および「I6) 授業時以外に学習した時間」については平均値の集計結果方法を変更した（P.15 参照）。このため、「I1) 出席率」および「I6) 授業時以外に学習した時間」については、2012年度以前の報告書と2013年度以降報告書では数値の意味が異なる。

4-1 文学部

1. 科目選定方針とねらい

2014年度については、導入ならびに基礎科目を中心として調査を行う方針を立て、以下の科目を選定した。

(1) 各学科・専修の導入教育（初年次教育）科目

- ①1年次必修科目
- ②1年次で履修可能な科目
- ③2年次必修科目
- ④2年次で自動登録となる科目

(2) 文学部基幹科目

(3) 各学科・専修で必要と認める科目

なお、学部による設問項目については、前年度を踏襲した。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

アンケート科目は合計137（春学期80、秋学期57）にのぼった。調査対象の科目総履修者数は9,758名であり、そのうち6,777名が調査に回答した。文学部生の回答率は69.45%。これは全学平均回答率の平均62.10%よりも高く、全10学部中で3番目に高い回答率で、文学部生の授業の行われ方に対する一般的関心の高さを反映していると思われる。アンケートに回答した文学部生の学年別分布は、1年次2,539名、2年次2,298名、3年次1,231名、4年次553名、不明156名。学年による回答者数の差違は、言うまでもなく、学部による科目選定方針（1年次および2年次向けの科目を中心とした）に起因すると見られる。

I「授業への取り組み方」について。平均92.62を示しているI1「出席率」は、13年度と同設問の平均91.73をわずかに上回っており、これは学部の科目選定方針に従って低学年学生が多くアンケート回答者となったこととも関係があるだろう。一方、I2「授業への積極的な参加」では3.94、13年度とまったく同じ数値が出ているが、I6「当該授業に関し授業以外に学習した時間」が13年度0.92に対し、14年度は1.04と数値やや上がっているとはいえ、回答割合の帯グラフを参照すれば、もっとも多いのは「1時間未満」という回答であるという点、注目すべきことではないかと思われる。つまり、「積極的な参加」というのをそのまま「出席率」と同じように見なしてはいないかと懸念されるということである。1年次2年次の入門演習ならびに基礎演習がアンケート対象科目の主軸をなしているという事情に鑑みれば、いわゆる「積極的な参加」を果たすためには、授業のための準備に当然のことながら多くの時間を要するはずだからである。このことは、I3「履修への準備」の回答のうちもっとも多かったのが、3「どちらともいえない」であること、あるいはI4「発展的な勉強」の回答のうちもっとも多かったのもやはり3「どちらともいえない」であることにもうかがえるであろう。特に入門あるいは基礎演習系の授業については、いわゆる「受けっぱなし」にはならないような授業運営上の工夫が、現在まで取り組んできた以上にさらに必要と言えるかもしれない（今回の授業評価から得られる今後の課題は、この問題を中核としている）。I5「シラバスの有用度」に関しては13年度が3.73であったのに対し、14年度は3.60と微減しているが、14回分すべての授業内容を明示するというシラバス作成方法の変更と、この数値がどの程度連動しているものなのか、今後も引き続き注視すべきであろう。

続いてⅡ「授業の進め方」について。いずれの設問においてもおおむね高い評価が与えられていると見えるが、Ⅱ1からⅡ9の各問のうち、Ⅱ3「授業のねらい」、Ⅱ5「静肅性」、Ⅱ6「教科書および参考書の効果」、Ⅱ7「板書の仕方」の4問については平均値が3点台であり、特に昨年に引き続きⅡ7「板書の仕方」については3.64とやや低い値を示している。ただし、Ⅱ7に関しては、まずは板書そのものの需要が減ってきていると見るべきだろう。というのは、Ⅱ7の回答者が3,912名と、他の設問とくらべて著しく少ないからである（Ⅱ7およびⅡ8をのぞくと、すべての設問の回答者は6,500名を超えている）。また一方、Ⅱ8「映像視覚教材の効果」に対する回答者数が、4,464名とⅡ7の回答者数を上回っており（つまびらかにはしないが、過去のある時点で、これらふたつの数値の大小が入れ替わったものと推測される）、旧来の板書方式ではなく、映像視覚教材への活用が進んでいて、授業運営における依存度がいよいよ高まっていることを意味している。おそらくこうした傾向は今後さらに顕著となるだろう（今後の授業評価方法への新たな提言ともなるが、「板書の仕方」を独立の設問とせず、これを含みつつ、「視覚的教材の提示方法一般の効用」を問うようなものへ、設問自体を変更すべき時期に来ているのではないだろうか）。さらにⅡ8「映像視覚教材の効果」に対する評価は4.09とⅡ設問中2番目に高いがあたえられており、授業を受講する学生たちも、生活一般におけるヴィジュアルメディアの浸透という同時代的状況を反映してか、板書やプリントなどの資料より、大型スクリーン等に映写される映像資料のほうにより印象や刺激を受けやすく、板書やプリントなどよりも、むしろすんなり受け入れやすくなってきているのだろう。しかしながら、映像メディアの利用については、上記のように教材として効率的な側面ばかりではないとも思われ、あるいは効率性が教材というものの主要な存在理由では必ずしもないのであり、したがって映像メディアを教材として利用する教員側に使用目的に関する意識を、あるいは異なるメディア間の使い分けに関する意識を、今後一層明確化しておく必要があるのではないかとと思われる。

Ⅲ「授業から得たもの」について。Ⅲ1からⅢ4の全てにおいて、低い評価とは決していえないものの、特にⅢ3「自分で調べ考える姿勢」の3.58を中心に、全体としてやや低調な結果と言わなければならないのではないだろうか。特に3「自分で調べ考える姿勢」については、文学部では大いに推進してゆきたい学生の資質のひとつであり、そのような工夫を従来より意識的に行ってきてもいるだけに、例年通りの低調な結果については、やはり厳粛に受け止められる必要があるだろう。もちろん文学部生の自主性に関わる問題は、この所見にもたびたび触れられており、先に述べた自主学習時間の少なさとも連動し、いわゆる「よい授業」を受けたところですっかり満足してしまっただけで、その先に進んでゆこうとする覇気にやや欠けると、つまり学生自体の資質の問題と見なすことも不可能ではないだろう。だが、受講者に自主学習、発展的学習を奨励するよう、教員側の授業への取り組み、あるいは授業の内外における学生への接し方についても、より意を用いた工夫がさらに求められるところだと考える。

Ⅳ「授業の総合的評価」については、Ⅳ1からⅣ4までいずれの設問についても比較的高い評価がなされている。しかし、上記Ⅲにも記述したとおり、特に文学部の学生が「授業には出席した」という水準で満足してしまっているかもしれないという点については、意識を新たにして授業計画を行い、また授業展開の場面場面でこの点を再想起しつつ、授業の具体的運営上の工夫を心がけられなければならないだろう。

なお、文学部による設問に関しては、昨年度同様、教室の大きさも受講者数もほぼ適切だったという回答が得られている。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

学生からの評価結果については、ほとんどの教員が妥当なものとして認めており、これまでの評価を踏まえ努力をした甲斐があったといったコメントや、必ずしも高評価を与えられなかった項目については積極的に今後授業の目標としたいといった前向きの所見が比較的多く見られた。ただし昨年度に比すると、やや教員の書き込みの分量が少ないという印象を得たのがやや残念であった。学生がこちらの意図したところを誤解していたということや、こちらの期待に充分に答えてくれる受講者が少ないといったことを遺憾に感じるといった所見も多く寄せられているのだが、それはむしろ担当教員の真摯な態度や熱意を物語っており、少なくともたった1行しか所見を寄せない教員などに比べれば、この学生評価アンケートの意義を強く認識しているがゆえと見てよいのではないだろうか。

上記2「集計データにみられる結果のまとめ」で分析したような授業外での自発的な取り組みや、あるいは授業そのものへの準備や復習にかかる時間の短さに関しては、予想通り、これに対する具体的な評価を所見として述べている教員数が少ないように見える。もちろん授業そのものに全力を傾倒する姿勢は大変好ましいことではあるが、授業から先へ、外へ、未来へ、学生を鼓舞して行くような姿勢が今後は教員にもものぞまれるのかもしれない。

4. 今後の改善に向けて

2014年度は、授業に対する評価とともに、本学部学生の学業への意識や取り組みの傾向を全体的に検証する結果となった。その示すところは、シラバスの有効性、教科書等マテリアルの選択、教材機材の使用の効率性等を含め、授業自体に対する全体的満足度の高さと、それとおそらくは呼応するのであろう、従来より文学部生の動向について分析されている、授業外での学習時間の少なさが今回もまた指摘すべき特徴となっていた。

今年度も例年通り現れたこの傾向は、昨年度の講評においても指摘したとおり、例えば「自分は文学部で何を学んだか」をうまく説明できないために、就職活動時に「苦戦」する者が多いといわれている文学部生の課題をも照らしているのではないだろう。「大学で何を学んだか」という問いに対する答えは決してマニュアル的に教わるものではなく、各自が努力や実践のなかから見出すべきものに違いないので、授業外に自主的に学問への取り組みを行うといった傾向の低さが、卒業を前にした学生が直面する具体的な苦境の潜在的徴候であるとも言えるのではないだろうか。

13年度の課題としては、授業でとりあげるトピック、教材の工夫を通じて、授業内にのみとどまることのない、つまり自主的な学習あるいは発展的な学習を動機づけるという、教員個々の取り組み方の質向上をあげていた。所見票などを概観した印象では、教員個々に独創的でヴァリエティに富んだ取り組みがなされていることがうかがわれ、その点を多とすることはできるだろうが、結果として、14年度の学生の授業評価を総覧する限り、必ずしもいまだ十分な成果を上げるには至っていないという判断を残念ながらせざるを得ない。無論、これは課題としては単年度で達成できたかどうかを問うべき性質のものでもないため、引き続き学部をあげ、教員一同の意識を新たにしつつ、努力してゆかねばならないだろう。

4-2 経済学部

1. 科目選定方針とねらい

2014年度は以下のような方針で科目を選定した。

- (1) 「講義科目 1 教員 1 科目」のアンケートは実施しない。
- (2) アンケートは原則春学期に実施する。
- (3) 共通シラバスを用い、授業の目的及び内容にある程度の共通性があり、複数コマ開講されている科目及び積み上げ方式の1年次科目について、アンケートを実施する。

2014年度は、共通シラバスを用い、授業の目的及び内容に共通性がある1年生用の基幹科目について、アンケートを実施した。学生側からの授業評価を通じて、経済学部が提供する1年次用の基幹科目の内容の適切さや課題を、学部全体として評価するのが大きなねらいである。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

2014年度のアンケートは、実施予定科目数としては67科目、実施科目数としては66科目となった。回答者は延べ2,617名であり、履修者数と比した回答率は74.47%となり、全学平均の62.10%より大幅に高く、異文化コミュニケーション学部、学校・社会教育講座に次いで高いものとなった。この要因としては、今年度の実施対象科目が1年次の必修科目あるいは自動登録科目が中心であり、学生の講義への出席率が相対的に高かったということが挙げられよう。

項目別平均値に関しては、全体としては、3点後半から4点台の良好な数値が得られているものの、「I この授業へのあなたの取り組み方・・・」の中の、「I3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」「I4 授業をきっかけに発展的な勉強をした」「I5 シラバスは受講に役に立った」が3点台前半にとどまっている。

前者の発展的な勉強の項目に関しては、今回アンケートを行った科目が1年次向けの基幹科目が中心であることを考えると、これらの科目の受講をきっかけに発展的な勉強に繋がっていないことは懸念される場所である。またこの傾向は、「I6 この授業に関連して授業時以外に学習した時間」の低さにも現れている。他方、後者のシラバスの項目に関しては、本年度実施したアンケートのほとんどが必修あるいは自動登録科目であったため、学生には授業の選択に関してシラバスを参考にすることがなかった（無意味であった）ことが大きな要因であると思われる。

また項目別平均値に関しては、学年別の大きな傾向は特に見られないが、授業規模別には、授業規模が小さいほど平均値が高い傾向が見られる。これは少人数教育や演習系科目の教育効果の高さを正確に反映したものであると思われ、その実施には様々な困難が伴うものの、学部として改めて認識しておくべきことのように思われる。

3. グループ集計にみられる結果

3-1 グループ集計の分類

今回、グループ集計では、基本的に同一科目をグループ化したが、経済情報処理・政策情報処理・財務情報処理に関しては、各学科別の情報処理科目であり、内容が類似していると考えられることから、同一グループとした。また1年次の基礎ゼミナールに関しては、さらに担当者（専任・助教・兼任）別にグループ化した。

3-2 グループ集計にみられる結果の概要

今回は上記のグループ化の方針に沿って、8のグループを集計した。2014年度は比較的授業規模が小さい科目に限定されていたこともあり、アンケート結果は総じて良好である。また担当者間における大きなばらつきも特に見られない。その中で特に目立った問題点と、それに対して推測される要因を指摘しておく。

まず、「情報処理入門」ならびに「経済情報処理・政策情報処理・財務情報処理」に関しては、他のグループと比べると、静粛性に関する平均値が低い傾向が見られる。これは科目の性質上、ある程度やむを得ないことなのか、あるいは教員が静粛性の管理に失敗しているのか、さらなる調査が必要のように思われる。また、情報処理系の科目や基礎ゼミナールに関しては、板書の仕方や映像視覚教材の使用に関する項目が他の項目と比べて目立って低い傾向が見られるが、これは科目の性質上、教員が板書やパワーポイントなどの映像視覚教材を比較的使わないであろうことが要因と考えられ、特に問題視する必要はないように思われる。

また昨年度指摘されていた基礎ゼミナールで一部の兼任講師の項目別平均値が低いことに関しては、本年度も見られたが、数値は若干改善されていた。

4. 担当教員の所見票に対するまとめ

アンケートを実施した66科目の授業のうち、所見票が提出されたのは62科目であった。なお、提出されていない4科目の担当者のうち、専任が1名、兼任講師が2名であった。所見票の全員提出に向けて、より徹底した注意喚起やアナウンスを行うこととしたい。

所見票への記述量については教員により大幅な差異が見受けられるものの、内容的には、板書、静粛性の確保、話し方（声の大きさ、スピード）等について改善を求める学生からの指摘に関して、多くの教員が次年度に向けての改善の努力をする姿勢を示している。

また、設問「I4 授業をきっかけに発展的な勉強をした」の平均点の低さと「I6 授業時以外に学習した時間」の少なさを懸念するコメントが共通して多くなされ、それへの工夫が必要であることが多くの教員に認識されている。ただ、これは昨年度も同様であり、この問題に対する対処の難しさを示している。

5. 学生からの意見（記述による評価）の集約

5-1 肯定的評価として多い意見の集約

肯定的評価に関する記述は多様性に富んでいるが、昨年度と同様、教員の説明や配布教材がよい、という意見は多く見受けられた。なお、授業の難易度や進行速度については、しばしば同一の科目内で肯定的なもの否定的なものが混在しているのも同様である。

5-2 否定的評価として多い意見の集約

否定的評価としては、これも昨年度と同様、板書や話し方、授業準備（コーラス等に教材をアップする手順等も含む）に関するものが多い。また、情報処理系の科目で静粛性が保たれていないことを指摘するものが多かったが、これは集計結果の分析から容易に想像できることである。

6. 今後の改善にむけて

上で述べたように、項目「I4 授業きっかけに発展的な勉強をした」と「I6 授業時以外に学習した時間」におけるパフォーマンスの低さは例年の問題であり、経済学部としての有効な対策が打ち出せていないのが現状である。この点に関して、パフォーマンスが良好な学部の取り組み等があれば、ぜひ学部間で共有化してもらい、参考にさせていただきたいと考えている。情報処理系の授業における私語の多さについては、担当教員と連携を図りながら、学期始めに行われている担当者打ち合わせ会議などで問題を提起し、解決策を探る努力をしていきたい。

4-3 理学部

1. 科目選定方針とねらい

2014年度は、「学部等の必要性に応じて選定」という全学的方針を守りながら、例年通り科目の選定を行った。これまで理学部では各学科とも、経年変化を調査するために、毎年なるべく同じ科目を選定する方針で行ってきた。2014年度についても昨年度同様、数学科は2010年度より実施の新カリキュラムで新たに設けた必修科目・選択必修科目を、物理学科は原則として複数担当科目を除くすべての講義科目を、化学科は必修講義科目と複数担当科目を除く選択講義科目を、生命理学科は原則として複数担当科目を除くすべての講義科目から教員一名あたり複数科目にならないように科目を選定した。共通教育科目については、「1教員1科目」をすでに充足していること、独自にアンケートを行うこともあり、例年通り非実施であった。

理学部独自の設問については、2013年度より「(V1) シラバスに沿って授業が行われた」を新設し、従来の3つの設問も(V2)～(V4)に順に繰り下げたが、2014年度も継続して実施した。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

理学部の回答率は65.14%であり、全学平均(62.10%)より高かった。学年ごとの回答者数は、1年生1,376名、2年生1,735名、3年生1,346名、4年生260名であり、3年生の回答者数が増加したが、1・2・4年生の回答者数が減少し、全体の回答者数も減少した。

学生の授業への取り組み方についての集計結果を見ると、「(I2) 授業に積極的に参加した」に、「大いにそう思う・そう思う」と回答した学生は昨年度より微増の74%ほどだが、「(I3) 十分な準備ができていた」や「(I4) 授業をきっかけに発展的な勉強をした」に、「大いにそう思う・そう思う」と回答した学生は微増の43～5%にとどまり、よい方向に進んでいるが、依然受動的な学習傾向が見られる。「(I1) 出席率」が「90%以上」と回答した学生が全体の77%を占めるが、「(I6) 授業時以外に学習した時間」に関しては「3時間以上」と回答した学生が7.2%で、「1時間未満・0時間」が約50%も占めており、時間面においてもやはり、授業に出るだけで自ら学ぶことのない学生が大勢いることがうかがえる。

2013年度の集計データと比較すると、「(IV1) わかりやすい授業だった」「(IV2) 授業全体の目標が明確だった」「(IV3) 学問的興味がかきたてられた」「(IV4) この授業を受けて満足した」という総合的な4評価項目がいずれもわずかだがポイントが下降している。学部等による設問のうち「(V3) (1年次春学期必修科目のみ) 教員は高校までの授業スタイルとの違いを考慮して授業展開してくれた」のポイントが2013年度の3.69から2014年度は3.52と0.17ポイントも大きく下げている。回答数が他の設問よりずっと少ないことは考慮する必要があるが、無視できない減少幅のように思われる。その他の項目は微増または微減の範囲内である。

学年別の比較では、昨年同様、出席率(I1)は学年経過にしたがって低下していた。一方で、「(I4) 授業をきっかけに発展的な勉強をした」の回答が1年生の3.15ポイントから4年生の3.42ポイントに、「(I6) 授業時以外に学習した時間」の回答が1年生の1.04ポイントから4年生の1.54ポイントに、「(III3) 自分で調べ、考える姿勢」の回答が1年

生の 3.43 ポイントから 4 年生の 3.83 ポイントに徐々に増加しており、高学年になるにつれて授業への取り組み方が改善されており、学習意欲が増していることを示している。また、「(I1) わかりやすい授業だった」(3.53→3.73)、「(IV2) 授業全体の目標が明確だった」(3.68→3.90)、「(IV4) この授業を受けて満足した」(3.52→3.82) と回答のポイントが学年進行でいずれも大きく上昇している。これは、高学年になるにつれて授業内容は高度化しているが、学生の理解力がそれを上回って成長し、授業の目標や内容を理解することができるようになってきていると考えられる。

学科別では、「(I2) 授業に積極的に参加した」と「(I6) 授業時以外に学習した時間」に関して、数学科のポイントが高い。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

肯定的評価を受けていると所見を述べている教員が多く見受けられた。同時に、授業以外の自主的な学習が低調であることへの懸念や、静粛性に関する所見(高評価、低評価)が多く示された。また、学生の大学生としての資質に関する疑問や、授業以外での学習時間の少なさに関する懸念も多く示された。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

説明が丁寧、板書が充実との高評価の一方、板書が多すぎるとの相反する評価について苦慮する所見が見受けられる。同様なものとして、授業の進行の速い・遅いと両意見がでることへの所見もある。配布資料の工夫や板書の改善、CHORUS の利用に関する記述が多く見受けられた。静粛性の改善を図る旨の記述もあった。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

学生の基礎学力や学ぶ力がかなり多様化していることを反映して、授業内容が難しい、多すぎるとの意見があることから、よりいっそうの授業内容の精選、配布資料の工夫、映写・動画資料の効果的利用、板書の改善、小テストの実施、課題の提示、CHORUS の活用などさまざまな改善策が述べられた。

4. 学生からの意見(記述による評価)の集約

4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

あげられた意見としては、説明が丁寧・わかりやすい、質問に丁寧に答えてくれる、板書が丁寧・きれい・大きく見やすい、パワーポイントの利用、理解を深めるための演習や小テスト・課題提示などが多い、授業の予定がはっきりしている、前回の授業の復習がある、演習実験が面白い、静粛性が高い、などが主なものであった。

4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

あげられた意見としては、授業内容が難しい・わかりづらい・易しすぎる、内容量が多い、進み方が速い、板書が速い・字が小さい・読みにくい、声が小さい、マイクの雑音、教科書を読み上げるだけ、課題が多すぎる、演習と講義の連携がよくない、教室環境がよ

くない、教科書がわかりづらい、スライドではなく板書にしてほしい、教員が学生を無視している、教員の準備不足、私語が多い、演習が少ない、などが主なものであった。

5. 今後の改善に向けて

教員の所見欄を見ると、個々の科目で個々の教員が授業評価アンケートの結果を念頭に次年度以降の授業を改善していく方策を検討していくという、授業評価アンケートの本来の機能はうまく働いていると考えられる。一方、学部全体としては、2014年度の授業評価アンケート結果で大きくポイントが減少した項目「(V3) (1年次春学期必修科目のみ) 教員は高校までの授業スタイルとの違いを考慮して授業展開してくれた」について、初年次科目の内容と高等学校カリキュラムとの接続を見ていくことが重要になる。2015年度からは高等学校で新課程を受けてきた学生が入学してきており、この点は対応が必要になる。

アンケート結果からは、授業には出席するが、授業以外での自主的な学習が極端に少ない学生が大半であるということが大きな問題であるという認識を多くの教員が共有していることがわかる。前年度の本欄においても同様のことが課題として挙げられた。この問題は、教えられることで勉強はすべて事足りると考えている、教えられることに馴らされすぎ、自ら学んでいく能力に難のある学生が非常に多いことを物語っている。これまで努力してきたとおり、内容の精選、配布資料の充実、映写・動画資料の効果的利用、話し方や板書の工夫、CHORUSの活用など授業をする側のテクニカルな改善はよりいっそう行う必要があるが、学生の学ぶことへの意識改善も、授業内容とは別なものとして、取り組んでいかなければならない。

4-4 社会学部

1. 科目選定方針とねらい

2012年度導入の現行カリキュラム下の、学部としての授業評価アンケート対象科目選定方針は以下の通りであり、2014年度は、前年を踏襲した従来通りの選定を行った。

- ①必修科目はすべて実施する
- ②講義科目については、科目の種類を問わず、なるべく「年間1教員1科目」となるように選定作業を行う
- ③産業関係学科の科目は実施しない

2012年度カリキュラムでは、従来学科別に行われていた初年次、2年次の必修科目を学部共通の必修科目と位置づけ、これまで以上に学部として基礎教育の充実を目指すことになった。そのため、これらの科目に対する学生の評価は、今後の基礎教育のさらなる充実に向け重要である。①については、2011年度までは「必修・選択必修の講義科目は、原則としてすべて実施する」というやや緩やかな方針をとっていたが、基礎教育を重視するカリキュラム改訂の実施を踏まえて、2012年度からは必修科目は全て実施するという変更をおこなった。

②は基本的には2007年度以降の選定方針を踏襲するものである。③は、産業関係学科は2006年度からの学部再編において学生募集を停止しているという理由による。

2. 集計データにみられる結果

2-1 授業規模別

151名以上の授業で、それ以下の規模の授業と比べ、3.2～3.3台と低い数字になったのは、やはり私語にかかわる設問「Ⅱ5 十分な静粛性が保たれた」の3.22(前年度3.19)だった。Ⅱ5については、50名以下では4.59(前年度4.56)、51～100名では4.06(同4.18)、101～150名では3.58(同3.61)であり、履修者数が増えるにしがって評価が大幅に下がるという傾向が見られる。前年度と比較すると、50名以下と151名以上で若干の改善の傾向が認められるが、大きな変化とはいえない。

「Ⅲ3 自分で調べ、考える姿勢」も151名以上で3.29と低いが、この設問は50名以下3.52、51～100名3.37、101～150名3.35とすべての規模であまり高くない。

「Ⅱ7 板書の仕方が適切だった」も151名以上で3.39だが、これは大教室の講義になればなるほどパワーポイントなどの視聴覚教材で説明を行う比重が高くなり、板書は学生からは見えにくくあまり積極的には行わない可能性がある、などの事情を斟酌すべきだろう。

2-2 学年別

従来と同様、授業出席率は学年が進むにつれて低下しているが、その他のほぼ全ての設問について学年が進むにつれて数字が高くなる傾向が見られる。カテゴリーⅡ「この授業の進め方は」、Ⅲ「この授業から得ることができたもの」、Ⅳ「総合的にみて、この授業は」のすべての設問で、学年が上がるにつれて数字が高くなる傾向が見られる。Ⅱは教員の授業の仕方ににかかわる問いだが、授業を聴く学生の側の姿勢も問われていることがわかる。

学年による数字の変化が大きいものは、Ⅱ5「十分な静肅性が保たれた」の1年 3.27 に対して4年 3.93、Ⅱ7「板書の仕方が適切だった」の1年 3.35 に対して4年 3.77、Ⅲ4「授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味」の1年 3.57 に対して4年 4.00、Ⅳ4「この授業を受けて満足した」の1年 3.64 に対し4年 4.01 である。

2-3 学科

全体としてメディア社会学科科目の数字が高めで現代文化学科科目、共通科目が相対的に低めの数字となっている。Ⅱ、Ⅲ、Ⅳの設問で4.00 を超えているのは、メディア社会学科科目が9、社会学科科目が5、現代文化学科科目は2、共通科目は2である。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

目立つのはやはり、教室での静肅性の保持についての記述である。多人数授業の担当教員を中心に改善を図る旨のコメントが多く書かれている。同時に、私語は受講生の姿勢の問題でもある、との指摘もあった。私語の注意が気になる、という学生のコメントには教員のジレンマも記されていた。

パワーポイントなどの視聴覚教材の工夫については一定の評価が得られており、さらなる工夫を行う、などの記述が多かった。

4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

こちらでも、受講生の多い授業で「静肅性が保たれない」ことに対するコメントが多く見られる。ハンドアウト、パワーポイントといった教材の使用については、肯定的な評価が多かった。

5. 今後の改善に向けて

私語問題、教室の静肅性保持の改善のため、2014年度は一部大規模授業で他学部履修者の人数制限を行った。これについては一定の効果があったと考えられるが、2015年度春学期も制限をかけていない科目などでやはり履修者が非常に多いものが現れてきた。この状況を受けて、履修者数制限科目の拡大を含めた善後策を検討中である。特に兼任講師担当の授業の大規模化は難しい問題を招くので、開講曜日・時限などの熟慮を呼びかける。

2012年度カリキュラム改訂で導入した社会学原論、社会調査法、基礎演習などでは担当者会議を設置して、授業の運営や内容について日常的に検討する体制をとっている。今後の授業運営および内容の改善につなげていく。

4-5 法学部

1. 科目選定方針とねらい

法学部では、2011年度より、全教員（専任・兼任）について授業評価アンケートを行うのは3年に1回とし、それ以外の年度は、本学で初めて授業を開講する教員および実施を希望する科目を対象にアンケートを行うことにした。2014年度は、本学で初めて授業を開講する教員および実施を希望する科目を対象にアンケートを実施する年度に該当するため、教員の希望を調査した上で、合計14科目につき授業評価アンケートを行った。なお、毎年度の全教員についての授業評価アンケートの実施をとりやめたのは、授業評価アンケートも回を重ねるにつれて、アンケート結果に対して授業改善に取り組むという姿勢が浸透しているため、3年に1回のアンケートで、学生からの意見のフィードバックとしては十分であると考えられたためである。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

回答率は、46.98パーセントであり、全体の回答率62.10パーセントと比較して低い。これは、アンケート対象となっている講義科目では、出席が成績評価に反映されない場合が多いことから、授業の出席率が低くなっていることが原因であると考えられる。

設問項目別平均値においては、前年度に引き続き、Ⅱ5「十分な静肅性が保たれた」(4.08)、Ⅱ9「教員は授業の準備を周到に行っていた」(4.34)が、比較的高い値を示している。講義科目を対象としたアンケートにおいて、静肅性および授業の準備が評価されていることは、教員の努力や工夫の成果と評価できよう。他方で例年と同様、Ⅰ3「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」(3.05)、Ⅰ4「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」(3.01)の値が低くなっている。ただし両項目とも昨年度(Ⅰ3(3.02)、Ⅰ4(2.97))との比較では、小幅ではあるが改善がみられる。もっとも、Ⅰ6「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」(0.92)は昨年度(0.96)よりも低い値となっている。学生の受動的な学習態度が窺われる状況には大きな変化がなく、主体的な学習を促す取り組みが要請される状況は変わっていないようである。

授業規模別平均値によれば、多くの設問項目において、授業の規模が大きくなるにしたがって平均値が下がる傾向が看取される。ただし、101～150名の科目と151名以上のクラスとの比較では、後者の方が高い平均値を示している場合も少なくなく、大規模の授業においても、学生を引きつける工夫が奏功している場合があることを窺わせる。もっとも、法学部全体がこのような傾向にあるのかを判断するには、より継続的な観察が必要である。

学年別平均値によれば、1年次生が、他の学年と比較して、多くの設問項目において低い値を付けていることが分かる。主たる原因としては、大学における履修・講義のスタイルへの適応が不十分であることが挙げられよう。特に、Ⅱ1「聞きやすい話し方だった」、Ⅱ5「十分な静肅性が保たれた」における差が顕著であることは、とくに大教室において、教員の視線(監視)を意識しにくい状況下で静肅さを保つことが1年生にとって容易でないことを感じさせる。

また、多くの設問項目において、2年生が3・4年生よりも高い値を付けていることが注目される。2年生が大学に慣れ、学習に集中できることは理解できまた望ましいことでもあるが、より大学に慣れているはずの3年生が2年生より低い値を示す原因としては、「手抜

き」を覚えてしまうということのほか、インターン活動の活発化等の影響もあるのかもしれない。なお、4年次生の出席率が低い(80.66)ことは前年同様であり、就職活動の影響が考えられる。

設問項目間の相関においては、授業の満足度(IV4「この授業を受けて満足した」)が、授業の分かりやすさ(IV1「わかりやすい授業だった」)授業目標の明確さ(IV2「授業全体の目標が明確だった」)だけでなく、学問的刺激的の程度(IV3「学問的興味をかきたてられた」)と強い相関を示しており、わかりやすいだけでなく、興味をかりたてる内容の授業が求められていることが窺われる。ただ、授業の満足度(IV4)と出席率(I1)や授業時間以外の学習時間(I2)との関連は弱く、評価の高い授業が、学生の学習態度を積極的なものへと転換させる動機付けとしての機能を果たしているわけではない可能性もある。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」まとめ

多くの教員が、学生の率直な評価を真摯に受け止め、相対的にであれ評価の低い項目があった場合については、その原因を検討したうえで、次年度以降に改善を試みる姿勢を明らかにしている。もっとも、授業時間外における学習の不足等に関しては、学生の側にも反省を求める記述も散見される。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」まとめ

多くの教員が、学生からの肯定的評価を今後の授業の励みとし、批判的な評価や要望に対して真摯な回答を寄せている。

学生の関心を引きつけ集中力を維持するいくつかの試み(授業中リアルタイム型のアンケート、映像資料の活用、感想レポートなど)に関しては、概ね学生から好評が寄せられているようであり、教員としても一定の手応えを感じているようである。

他方、授業で使用するレジュメ等参考資料、パワーポイント、板書の分量・形式・内容などについてなお様々な要望が寄せられていることが窺われる。本年度は本学で初めて授業を開講する教員による科目が主として対象になっていることから、これらについては、教員の側でも試行錯誤の状況にあることが窺われるコメントが多く寄せられている。

他に、授業の静粛性に関して授業中の人の出入りが多いとの指摘に関して、クラス・サイズ等教員の努力の範囲外の問題であるとのコメントがあった。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

多くの教員がアンケートの結果を踏まえて授業改善に向けた検討を行っている。内容は各教員が認識した課題に応じて様々であるが、一般的なブラッシュ・アップに加えて、①レジュメや板書の内容・形式の改善、②各回の内容・分量の調整による延長・積み残し・消化不良等の防止、③授業時間外の自習を促す(手助けする)取り組みの模索、④私語等への対処方法の改善等が挙げられる。

4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

肯定的評価の記述としては、授業内容、レジュメ等につき分かりやすさに関するものが目立つほか、リアルタイムのアンケート等の双方向型の取り組みにも肯定的評価が集まっていたものと思われる。またある授業では、冒頭に時事問題と授業内容との関連につきコメントするという試みが多くの学生の理解の助けとなっていたようである。

4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

否定的評価の記述としては、板書・レジュメ等について、より詳細さ・分かりやすさを求めるものが目立つよう見受けられた。また、授業中の静粛性に関する苦情のほか、授業が延長することに関する不満も一部で示されている。

5. 今後の改善に向けて

立教で初めて授業を担当された教員による科目が主たる対象となった本年度のアンケートと教員の所見票からは、授業評価アンケートが、とくに立教の学生と直接コミュニケーションをとる経験の少ない教員にとって、学生からの率直なフィードバックに基づいて授業内容をブラッシュ・アップする有益な機会であることが改めて感じられた。もともと、全体の結果に関しては、小規模な変化は散見されるものの、概ね昨年と同様であると評価できよう。すなわち、全体としては授業内容につき一定の評価がされているものと思われるが、学生に主体的・積極的な学習を動機づけることについては課題が残るという状況である。本「総評」の内容は教授会でも報告されており、かような状況認識の共有はある程度進んでいるものと思われるが、対応策としては各教員が各自にあるいはインフォーマルな意見交換に基づいて試行錯誤している段階である。今後はその継続とともに、成果を挙げていると思われる取り組みについてより具体的な情報共有を図るなど、より組織的な取り組みの要否も検討される必要があるかもしれない。

4-6 経営学部

1. 科目選定方針とねらい

経営学部は、2～4 年次演習および BLP・BBL 関連科目を除いて、原則として、全科目を対象に、春学期 55 科目、秋学期 51 科目の合計 106 科目で授業評価アンケートを実施した。「学生による授業評価アンケート」の結果は、授業を担当する教員に対して重要なフィードバック効果をもたらし、授業の質を高めるのに寄与するものと考えているからである。なお 2014 年度から BLP および BBL 関連科目について実施しない理由は、これらの科目が演習系の科目であり、科目の独自性も強いので、大学所定のアンケートでは十分に実態を把握できないからである。学部でも独自に詳細なアンケートを実施していることから、これらの科目を除くことにした。

2. 集計データに見られる結果のまとめ

学生側の授業に対する取り組みを示す6項目については、「授業全体を通じての出席率（I1）」の平均は92.59、「この授業に積極的に参加した（I2）」は3.99とそれぞれ高い数値を示し、積極的に授業に取り組んでいたことがうかがえる。ただし、アンケート実施科目の回答率（回答者数/履修者数）でみると58.18と低いことを考慮すれば、積極的に参加する学生とそうでない学生に差がある可能性が懸念される。

一方、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた（I3）」（3.53）、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした（I4）」（3.43）、「シラバスは受講に役立った（I5）」（3.52）は、若干低くなっているが、なお全体としてみれば高いと評価できる。なお昨年度と同様、シラバスの記述については定型化されており、字数にも限りがあるが、その範囲内で、学習計画等に役立つ内容にしていくよう引き続き努力が必要となる。特に問題となるのは、「授業時以外に学習した時間（I6）」が1.08であり、授業への積極的な参加は見られるものの、予習・復習などへの意識は必ずしも高いとは言えない結果であった。課題の出し方などの工夫が必要である。

授業の進め方については、「板書の仕方が適切だった（II7）」の平均3.73が最低であり、他のすべての項目は3.9以上という高得点であった。板書については、教員側の工夫も必要であるが、「該当しない」という回答が5割程度おり、経営学部の演習系が多い授業形態の特徴を反映していると考えられる一方、そのためか、板書が不得手で、プリントやレジユメの配布を当然と考える学生が増えてきていることとも関係があると推測できる。授業の進め方については、全体として学生から一定の評価を得ているといえよう。一番高かった「教員は授業の準備を周到に行っていた（II9）」については、4.26という高い評価を得ている。学部として、現状に満足せず、今後も努力していく必要がある。

授業から得られたものを示す4項目については、いずれも3.68以上であった。中でも、「授業で扱った分野に関する基本的な専門知識（III2）」が最も高く4.02で、「自分で調べ、考える姿勢（III3）」が最も低く3.68であった。「自分で調べ、考える姿勢」については、数値自体は低くはないが、学年別に見ると、学年が上がるにつれ、その数値も上がっている（1年3.53、2年3.63、3年3.75、4年3.90）、低学年ではまだ自学自習が十分ではないためではないかと推測できる。全体としてこの項目を高める工夫に加え、特に低学年への自学自習を促す工夫が必要であると考えられる。

総合的評価の4項目では、最も低い評価でも「学問的興味をかきたてられた(IV3)」が3.91と高い得点で、「この授業を受けて満足した(IV4)」も3.99と高得点であった。その意味では学生の満足度は全体的にみてもある程度は満たすことができていると評価できる。ただ学年別にみると、学年が下がるほどに数値も下がり、1年は3.88と最も低かった。決して低い評価ではないが、低学年の学生についての対応が必要と考えられる。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

「授業評価に対する担当教員の所見」については、総合評価が比較的高かったことに言及する回答が多く見られた。ただ、授業の予習や復習、授業外学習時間、発展的学習について十分な評価が得られていないとの所見も比較的多くみられた。また私語に対して言及している所見もみられ、教員からの注意の必要性とともに、学生自身の自覚の必要性にも言及がなされている。

「記述による評価に対する担当教員の所見」については、学生の肯定的評価については、映像や画像などの教材の活用と言及し、その効果に対して確認がなされている。他方、否定的評価として、パワーポイントやレジュメの事前配布についての言及が散見され、これに対しては、教員からの事前にテキストや指定参考文献を読んで予習をすることが必要との所見もある。また課題の多さに対する不満について、過大にならない配慮が述べられるとともに、定着のためには課題が必要であるとの所見も見られた。

「改善に向けた今後の方針」については、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」や「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」についての得点の低さ、「授業時以外に学習した時間」の少なさについて、多く言及されており、理解度を上げるためにも、予習をさせる工夫の必要性が改善点として認識されている。この点に関して、履修者が多い場合は難しいが、自発的学習の素材を提供するなどして主体的に学ぶ環境づくりが必要であるとの意見も見られた。また板書(パワーポイントのスライド操作)のスピードが早いことに対して、情報量を減らすなどの改善策の意見が出されているが、内容が薄くなることに対する懸念も述べられている。映像資料、パワーポイントの活用についても、学生の肯定的な評価が多いので、その点の改善の意見も見られる一方、理解定着のためには理論的説明とのバランスの重要性にも配慮すべきであるとの意見もあり、両者のバランスの重要性が指摘されている。教室の静粛性についてもとりあげられ、その改善について言及されているが、学生の自覚と協力が必要であるとの意見もあげられている。

4. 学生からの意見(記述による評価)の集約

学生の「肯定的評価として多い意見」については、教員のスキルとして丁寧な説明、わかりやすい説明、わかりやすいスライドやレジュメ・プリントの作成、授業の仕方として映像資料の活用、リアクションペーパーに対するフィードバック、発言する機会、グループワーク、明確な授業内容、最近のニュース、話題、具体例の活用、一回一回の授業でやるべきことが明確、図やグラフを使った説明、授業の環境として私語が少ない静粛性があげられている。またレジュメ、スライドを印刷した資料の配布、webへの公開に対しても肯定的評価が多い。

また学生の「否定的評価として多い意見」については、板書に関連するものが多く見られ

た。たとえば、パワーポイントの切り替えが早い、書く時間がない、先生の話聞いてノートを書くのは間に合わないなど、板書ができないという意見が多い。また字がメインのスライドだったので見づらい、スライドの文字の大きさが小さい、ノートがとりにくいパワーポイントだ、内容が分かりづらい、文字が多すぎなどスライドの形式についての指摘もある。板書を撮影をする学生もいるようであり、携帯での撮影を認めないことに対して否定的な評価する意見がある一方、スライドの写真を撮る音がうるさいとの意見もある。さらにレジュメなしで授業を受けたくない、スライドを配布してほしいといった資料の配布を希望する学生が見られる。授業の静粛性については、私語に注意をしない、私語が多いという指摘と、逆に私語に厳しすぎる、静かすぎて発言しにくい、注意の際に雰囲気が悪くなる、注意の仕方が嫌味などの指摘もある。そのほか、教員のスキルとして聞きづらい、話し方が面白くない、声が小さいといった指摘、また授業の内容としてポイントが明確でない、レベルが低い、リアクションペーパーのフィードバックをしない、授業の進め方として一方的に話している、スライドを読むだけ、授業スピードが速い、参加型の授業にしてほしい、グループワークで学生のモチベーションに差があるなどが挙げられている。

5. 今後の改善に向けて

総合的評価をみると比較的高い評価を得ているといえるが、しかし学生側の授業に対する取り組みを示す6項目のうち、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた（I3）」、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした（I4）」が相対的に低く、授業時以外での学習時間も決して高い値になってはいない。また授業から得られたものを示す4項目のうち「自分で調べ、考える姿勢（III3）」も相対的に低い。これらの値から、授業時には参加をするが、それ以外の時間では、学問から離れてしまっている様子がうかがえる。この点については、それぞれの講義の形式があり、全ての授業で一様に方法を論じることは難しいが、課題や宿題を与えたり、事前にテキストを読ませるなどして講義への準備を促す必要がある。ただ、課題に対しては学生の否定的な評価もあり、学生自身の主体的な学習姿勢にも期待したい部分はある。また映像資料の利用は学生の学習にとって効果的であると考えられるが、理解した気になりやすいので、定着のためには文字による理解や十分な理論的説明とバランスをとることに留意する必要がある。パワーポイントの活用やレジュメ・スライドを印刷した資料の配布も学習にとって効果的であるが、適度な分量、見やすさへの配慮、適度な進度が必要と考えられる。しかし講義を聴講しながらの板書能力は学生にとって必要な能力でもあるので、その点を自覚のうえ板書に取り組むことを期待したい。

4-7. 異文化コミュニケーション学部

1. 科目選定方針とねらい

異文化コミュニケーション学部では 2014 年度の FD 目標として、「新カリキュラム」の完成、学部のさらなる国際化、キャリア教育の充実の 3 点を掲げた。このうち留学準備の重要な意味を持ち学部の国際化のポイントになる Cultural Exchange の春学期 6 科目、「新カリキュラム」の中核というべき College Life Planning (CLP) の春・秋学期 1 科目ずつの計 2 科目について、授業評価アンケートを実施した。これにより、2016 年度実施予定の新カリキュラムの充実に資することがねらいである。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

2-1 全体

2014 年度の実施科目数が少なく、8 科目のうち、6 科目はグループ集計で現われるので、ここでは全体的結果を見ることとする。

実施科目数が少く、うち 6 科目の Cultural Exchange は履修者数が 20 名前後の小規模授業であるためか、全体の回答率は 90%を超え、履修者のうちの相当部分の回答を得ることができた。

学部平均値で「授業への出席率」(I1)は 97.18%、「積極的に参加した」(I2)も 4.39 の結果で、学生たちの積極的授業参加を確認できる。「授業時以外に学習した時間」(I6)は 1.17 で堅実な水準であった。「履修にあたっの十分な準備」(I3)についても比較的高い意欲がうかがえるが、「授業をきっかけに発展的勉強をした」(I4)については平均的結果を示している。学生の真意はわからない点もあるが、留学に役立ったという感想が多いことを考えると、留学という体験を実践的情報としてとらえ、「発展的勉強」の範疇に入れて考えなかった可能性もあるかもしれない。「シラバスが役立った」(I5)という結果がそれほど見られないのは、共通シラバスがやや抽象的に感じられたためと思われる。

授業の進め方については、昨年度と同様「教員が授業の準備を周到に行っていた」(II9)、「映像視覚教材の使用が効果的だった」(II8)の 2 項目が、高い評価を得ている。その一方、「板書の仕方が適切だった」(II7)の結果が低く、回答者数自体が他の項目と比べて目立って低かった。これについてはある担当者も指摘しているが、そもそも板書をする授業がほとんどなく、回答のしようがなかったため、多くの学生は「該当しない」をマークしたが、一部の学生がよくわからずに回答した結果である可能性が高い。ここについては今後、アンケートの項目設定ないし実施の際に注意する必要があるだろう。

授業から得ることができたもの(設問Ⅲ群)については、総じて良いレベルになっている。学生の感想にあるように、留学について知識を得ることができたという満足感が「自分にとって新しい考え方・発想」(III1)の 4.29 という高い数字に表れている。一方、「現代に通じる普遍的な意味」(III4)や「専門知識」(III2)という点では平均的のレベルにある。今回アンケートを実施した科目の性格からいうと、この結果が不適切ということはないと思われるが、学部のカリキュラムの全体的設計の中で普遍性や専門性につながり補完する体系を考え、各科目の意味合いを学生たちに明確に伝えることは重要であろう。

総合的評価に関する項目は、留学という大目標を前にして準備のための授業だったので、「授業全体の目標が明確だった」(IV2)が 4.26、「わかりやすい授業」(IV1)と全体的満足

度 (IV4) が 4.19 と高くなっており、よい結果になっているが、「学問的興味」(IV3) は 3.95 とやや低かった。学生たちは留学準備ということ「学問的興味」と結び付けて考えなかったのだと見ることができる。その他の項目については平均的に良い結果を得ていると思われる。

2-2 グループ集計

統一カリキュラムで実施している Cultural Exchange (2 年次春学期) について、カリキュラム検証のためグループ集計を行った。

おおざっぱにいうと、6 つの授業のうち、日本語を第一言語とする教員 2 名が行なう授業とそれ以外の教員 4 名の授業とで差が出ている。たとえば、一番端的には満足度 (IV4) について、日本語第一言語教員は 3 点台であるのに対し、それ以外の教員はすべて 4 点台と高くなっている。他の項目でも大部分、日本語教員とそれ以外の教員との間で差が出ている。授業は統一シラバスであるが、このような結果になった原因について今後検討していく必要がある。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

Cultural Exchange の 6 名の担当者の内、日本語を第一言語としない教員たちは、授業運営がとてもうまくいき満足感を表示している。一方、日本語話者教員の場合は、英語が得意でない学生への支援や、学生の求めるものをより正確に把握する必要性について言及している。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

日本語を第一言語としない教員たちは肯定的な見方が強いが、日本語話者教員からは、学生の間にある英語運用力のレベル差にどう対処するかや、専門性のある授業を求めるといふ学生の要求にこの科目がどのように応じることができるのかを検討すべきだとの指摘がなされた、カリキュラムの設計や実践的運用に関わる指摘であると思われる。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

授業への参加意欲を高める工夫、レベル差に対処する方法などを、授業コンテンツの改善やシラバスの明確化を通じて実践していくことを、今後の改善の方向性として担当者たちが述べている。学生の自主的な勉強意欲を引き出す点に一層力を注ぎたいと、ある担当者が述べていたが、全教員の所見に通じるものである。

4. 学生からの意見 (記述による評価) の集約

4-1 「肯定的」

授業の目的が明確である、留学生やゲストの話が興味深く留学準備に適切だった、などの肯定的評価があった。同時に、わかりやすかった、英語で話せてよかったという意見があるとともに、すべて英語でするのは無理ではないかという意見も散見され、今後の適切な対応が必要と思われた。

4-2 「否定的」

CLP の一部の授業で教員の日本語がわかりにくいことがあったという感想があった。異文化コミュニケーション学の観点からいえば、外国人の日本語について理解しようとする努力するというのも重要な課題であるが、授業におけるその点の意義づけは徹底されていなかった。

Cultural Exchange では、学生の英語力の差が大きいので、レベル別にクラスを編成すべきだとの意見がかなり見受けられた。しかし、やや難しいので英語力の低い人に効果的だったと評価する声もあった。もうひとつ、課題・宿題が多すぎるという意見も相当数あった。これは今後の授業準備の重要な課題になるだろう。

5. 今後の改善に向けて

前年と同様、学生たちの授業への評価は高いように見受けられる。教員側でも、成果をふまえつつ、今後のさらなる改善を図ることをめざしている。

留学準備の科目についての目的意識は学生に対して浸透してきた。また、学生たちの意欲を高めることでも肯定的効果を持ったようだ。ただし、留学への「目的意識」といった場合、その実質についての受け止め方は、学生によって、また留学する地域によってちがいがあっても事実で、カリキュラムや授業を準備する教員側との意識のずれがあれば、今後の分析を通じて克服しなくてはいけないだろう。

Cultural Exchange の担当教員が日本語を第一言語とする者であるかどうかによる評価のちがいも、そうした意識のずれと関わりがあるかもしれないが、今後の授業を通じて課題を解決していきたい。

なお、2014 年度アンケートは前年よりも実施科目が少なく、8 科目中の 6 科目が少人数で行なわれたため、授業評価アンケートと比較すると、私語についての指摘は多くなかった。

4-8 観光学部

1. 科目選定の方針とねらい

次のような方針で授業評価アンケートの実施科目を設定した。

- 1) 原則として年間1教員1科目とする。
- 2) 演習、実験、実技を伴う科目は対象としない。
- 3) 複数教員担当科目は対象としない。
- 4) 集中講義は対象としない。

2. 集計データに見られる結果のまとめ

設問I1「授業全体を通じての出席率」では、全体の約60%の学生が「90%以上」、約32%の学生が「70-89%」の出席率と回答した（平均値 90.15）。さらに、設問I2「この授業に積極的に参加した」では、全体の70%強の学生が「大いにそう思う」または「そう思う」と回答した（平均値 3.92）。

一方、設問I3「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」とI4「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」では、「大いにそう思う」または「そう思う」と回答した学生の合計は、どちらも約40%（平均値はI3が3.28、I4が3.20）にとどまった。とりわけ、設問I6「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」については、「1時間未満」または「0時間」と回答した学生の合計が約70%（平均値 0.78）であった。

この授業から得ることができたものに関する設問のうち、III3「自分で調べ、考える姿勢」については3.55と平均値が低い反面、III1「自分にとって新しい考え方・発想」とIII2「授業で扱った分野に関する基本的な専門知識」については4.00に近い数値となっていることから、専ら教室で学ぼうとする姿勢は見て取れるものの、授業を機会に自ら探究して知識を深めようとする意識には乏しい印象である。

授業の進め方に関する9つの設問のうち、8つの設問については、「大いにそう思う」または「そう思う」と回答した学生が、全体の70%以上（平均値 4.05~4.36）を示している。設問II7「板書のしかたが適切だった」については、およそ半数近くが「該当なし」を選択しており、板書に代わってパワーポイントなど映像視覚教材の活用が進展していることが改めて示されている。

総合的にみて、この授業はIV1「わかりやすい」は4.04、IV2「授業全体の目標が明確」は4.07、IV3「学問的興味をかきたてられた」は3.91、IV4「この授業を受けて満足した」は4.01と概ね高得点であった。ただし、受講した授業を通じて、V4「現代社会における観光の重要性を認識した」が3.77、V5「観光関連の仕事に興味をおぼえた」が3.56、V6「観光を学ぶことにより興味がわいた」が3.72となっており、観光学部が教育を通して学生に伝えようとしていることが、授業への出席のみでは十分に獲得できていないことが改めて提示されている。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

授業評価が、授業の質を保証することに一定の効果を発揮していることは所見から確認できる。肯定的な評価は教員の励ましとなっており、とくに前年度の授業評価を踏まえて、

工夫、改良に努めた点について評価が高まった場合にはなおさらである。しかし、たとえば「前回の授業評価（授業内容の量が多すぎる、授業内容が難解）を踏まえて、概念や理論等を削減した結果、授業自体の情報量まで減らしてしまうことにつながった」などの所見は、「わかりやすさ」を追求する学生の姿勢にどこまで応じるべきかという問題を改めて提起している。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

学生一人一人の関心とバックグラウンドの違いによる多様な記述には戸惑いがみられる。多くの授業で、記述による評価への記載は分散的・個別的であったが、授業によっては受講生の大半が記述による評価を詳しく記載している例があり、このような授業では担当教員の所見も詳細であった。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

授業評価と記述による評価をもとに、きめ細やかな対応を促される授業環境にあることが読み取れる。出席回数の異なる学生の意見が、数値としては同列に扱われることに対する違和感の表明など、アンケート方法の課題も含まれている。

4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

肯定的評価のうち、具体的な記述は教員の励ましになっている。しかし、肯定的評価とされる記述の多くに「…わかりやすかった」、「…面白かった」等の表現が目立つことは、学生が教室での授業に求めているものと、教員が授業を通して学生に伝えようとしていることとの間に、意識のズレがある印象である。「わかりやすい」という意見を肯定的評価と捉えるべきかどうかについては考慮の余地がある。

4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

否定的評価とされる記述の多くは、教室の前方に移動したり、教室で担当教員に直接申し出たりすることによって、容易に改善または対処できる性質の意見が大半を占めた（たとえば「声が小さい」「板書が読み取れない」「パワーポイントのスピードが速い」…など）。学生側にとっては、否定的評価を記述する意味とその方法を身につけることもまた必要かも知れない。

5. 今後の改善に向けて

昨年度の本欄は、「何よりも予習や事前準備を十分にした上で疑問や知識を持って受講すれば、理解力が高まることを学生自身に気づかせる工夫を検討しなくてはならない」と指摘している。このことは、本年度も同様であり、予習や事前準備に限らず、授業中には理解が進まなかった点や、疑問に感じた点、関心を抱いた点について、自ら図書館の書籍や文献を通して理解を深め、場合によっては授業で扱われたフィールドへ赴いて観察を加えるなど、授業時間以外の学習時間を確保できるような意識と生活を身につけるよう誘導する必要がある。「教えすぎない」「疑問を残す」など、時には良い意味で「わかりにくい」テーマを取り入れる工夫も、現状の改善につながるのではないかという印象を持った。

4-9 コミュニティ福祉学部

1. 科目選定方針とねらい

2014年度の科目選定の基準は、以下の通りである。教員自身の選定を最重視しつつ、(1)1教員1科目以下の実施を原則とする、(2)資格科目を優先する、(3)演習科目は対象外とする、(4)昨年度実施科目を優先する。この結果、延べ109科目においてアンケート調査が実施された。

2. 集計データに見られる結果のまとめ

2-1 全体集計にみられる結果

総合評価（質問項目Ⅳ）とその他の評価（設問項目Ⅰ～Ⅲ）との関連は次の通りである。まず「授業の分かりやすさ」（Ⅳ1）および「授業目標の明確さ」（Ⅳ2）は、平均値がそれぞれ4.02、4.06で、昨年度の平均値3.99、4.02よりやや上昇している。「授業の分かりやすさ」（Ⅳ1）との相関傾向が最も高いのは、係数.707の「各回の授業内容は明確だった」（Ⅱ4）であり、これに.697の「聞きやすい話し方だった」（Ⅱ1）、係数.683の「各回の授業のねらいは明確だった」（Ⅱ3）が続いている。

「授業への満足度」（Ⅳ4）は4.00であり、これも昨年度の3.97より若干の上昇が見られる。そして相関の高いものは、「授業の進め方」（Ⅱ5、Ⅱ8を除くⅡの全項目）で、.600以上の係数となっている。それだけに「十分な静肅性が保たれた」（Ⅱ5）の係数が.461と低い数値となっていることが注目される。

さらに満足度（Ⅳ4）が、「出席率」（Ⅰ1）、「履修にあたっての準備」（Ⅰ3）、「授業外学習」（Ⅰ6）と結びついていないことが、.142（Ⅰ1）、.396（Ⅰ3）、.166（Ⅰ6）という相関係数に如実に表れている。ことに「この授業に関連して、授業時間以外に学習した時間」（Ⅰ6）との相関係数が.166と極めて低く、学習時間が2時間未満の学生は、回答者数7,395人のうち6,450人、すなわち87.2%もおり、2012年度の89.6%、2013年度の87.9%という数値と比べて、改善傾向がほとんど見られないままになっている。

以上より、満足度が高いとはいえ、学生の主体的・自律的な学習を促す対策を今後も多角的に講じてゆく必要がある。

授業の進め方（質問項目Ⅱ）については、ほぼ全ての項目で比較的高い数値（3.99以上）を示しているが、「板書の仕方」（Ⅱ7）のみ、やや低い評価（3.67）である。

「静肅性の保持」（Ⅱ5）は3.99であり、昨年度の4.05より落ちたとはいえ、比較的高い数値が出ている。しかしこれをどう解釈したらよいのか、非常に気になるところである。もしこれが、現状に慣れてしまっていることを意味する数値であるとしたら、きわめて由々しき事態である。ちなみに「静肅性の保持」（Ⅱ5）との相関係数の高いものを上から挙げると、.507の「授業の内容が明確だった」（Ⅱ4）、.499の「板書の仕方が適切だった」（Ⅱ7）、.484の「授業のねらいが明確だった」（Ⅱ3）、.480の「教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった」（Ⅱ6）、.477の「授業全体の目標が明確だった」（Ⅳ2）となる。

学年進行をめぐるっては、学年が上がるに連れて出席率は減少するが、その他の項目の多くは次第に高くなっている。

2-2 学科等別集計にみられる結果

ここでは、全項目に対する記述は紙幅の都合から割愛して、昨年度来、本学部の重要課題となっていることの一つ、「授業時間以外に学習した時間」(I6)との相関係数の高い項目をめぐり、学科等間に差異があるかを取り上げてみたい。

まず福祉学科において、もっとも相関係数が高いのは「授業をきっかけに発展的な学習をした」(I4)である。数値は.404で、「比較的強い相関」がみられた。この他に.20を超える項目は、「履修にあたって十分な準備ができていた」(I3)が.310、「自分で調べ、考える姿勢」(III3)が.296であった。

コミュニティ政策学科においては、「授業をきっかけに発展的な学習をした」(I4)が.490、「履修にあたって十分な準備ができていた」(I3)が.406で、2項目が「比較的強い相関」を示している。このグループにおいて、.20を超える項目としては、「シラバスは受講に役立った」(I5)が.253、「板書のしかたが適切だった」(II7)が.236、「自分にとって新しい考え方・発想」(III1)が.202、「授業で扱った分野に関する基本的な専門知識」(III2)が.224、「学問的興味をかきたてられた」(III3)が.345、そして「授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味」(III4)が.244、「学問的興味をかきたてられた」(IV3)が.234という数値を示している。

スポーツウエルネス学科を見ると、やはり高い数値が出ているのは「授業をきっかけに発展的な学習をした」(I4)である。ただし数値は.395で、「弱い相関」であった。この他に相関係数が.20を超えていた項目は、「授業に積極的に参加した」(I2)が.210、「履修にあたって十分な準備ができていた」(I3)が.326、「シラバスは受講に役立った」(I5)が.229、「自分で調べ、考える姿勢」(III3)が.236であった。

専門関連科目の場合、もっとも数値が高いのは.399の「授業をきっかけに発展的な学習をした」(I4)で、「弱い相関」であった。

3. グループ集計にみられる結果

3-1 グループ集計の分類

①学部共通科目、②学科専門科目、③専門関連科目にて、全9のグループを設定した。そして「この授業に関連して、授業時間以外に学習した時間」(I6)の項目に関して、9グループのすべてにおいて、3時間以上と回答した学生が10%に満たないという極めて低い数値となっていることが指摘される。

4. 担当教員の所見票に対するまとめ

4-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

主として総合評価(IV)の結果を受け、「概ね妥当な評価である」とする記述が多かった。その一方で、「記述が少なく、所見に苦慮する」「もう少し率直に書いて欲しかった」といったコメントがあり、これは、一時期に多数の科目にて調査する形式に起因するとも思われる。またレジュメを次回の、あるいは前回の講義にて配布することによって、事前事後学習を促すなど、学生の主体的な学習意欲を涵養する取り組みを記す所見も見られた。

4-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

「授業時間以外に学習した時間」「自発的な学習の促進策」をめぐる所見を中心に見てゆく。たとえば「参考資料を提示し、その資料からの出題も行うようにしたい」、「学生の発表の機会をつくり、学生同士のやり取りを促す」、「予習復習用の素材を提供する」、「〇〇が課題の日が予想より好評だったので、ここを少し膨らませることも検討したい」、「リアクションペーパーの授業に関する質問について、次時の導入において充分に対応できるようにする」、「新聞記事や図書などを紹介する」、などの記述が見られた。

あるいは「教員も楽しみながら授業運営をする」、「文献講読の時間を長めにとるようにする」、「小レポートやクイズ形式での出席確認などを取り入れる」、「教員が解説や分析を行うまえに、学生に〔事前配布した論文や資料をめぐって〕簡単に報告してもらおう」、「学生同士の話し合いの機会を設けたり、質問への回答もおこない、双方向的な授業を展開する」、「問題解決型の学習スタイルをとる」といった所見が記されていた。

静寂性の保持に関しては、抜本的な解決策を読み取ることができなかった。そうしたなかで、「授業評価でも『静寂性が保たれていた』項目が高いようだったが、講師としてはまだ不満が残る」という感想を記していたことが気になるところである。私語は学生同士だけでなく、教師に対しても人権侵害であることを周知する必要がある。

また 2000 年代初期には、学生同士が私語を注意し合う場面がしばしば見られた。こうした「文化」「風潮」を育成することが喫緊の課題であるが、具体策をアンケートの集計から、析出することはできなかった。

4-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

全般的に、教授法の仕方のさらなる改善、具体的にはパワーポイントによる授業の交通整理、画像資料の使用（バリアフリーに考慮しつつ）、板書法の工夫をめぐる所見が多かった。ついで双方向性、それも教員と学生間における双方向性だけでなく、学生同士のディスカッションを組み入れるという改善策を挙げ、その有効性を指摘する回答が散見された。

5. 学生からの意見（記述による評価）の集約

5-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

パワーポイントや映像教材の使用、現場の実際について語るゲストスピーカーの招聘などが、肯定的な評価として記述されている。また、「数人で協力して課題をこなすところ」のように、小グループに分かれての学生同士の議論、あるいは教員との対話も、かなりの好感度をもたれている。履修者の人数に関しても、「人数は多いけど参加型に近い進められ方でよかったです」という意見があるように、大人数の講義においても参加型・双方向型の授業が求められていることが読み取れる。

そうした双方向性の確保の一つとして、リアクションペーパーの授業への反映も評価が高い。また「授業中に出てくる単語をひとつひとつ丁寧且つわかりやすく説明してもらえた」という記載のように、専門用語を噛み砕いて説明することも有効な方法である。あるいは「レジュメを事前にコーラスにアップしてくれたので、授業で役立ちました」という意見もあった。

そうしたなかでも板書をスクリーンに映すという方法が、少なからぬ学生から肯定的な評価が記されている。

5-2 「否定的な評価として多い意見の集約」

例えば、1限であること、教室の規模と受講人数のバランスをめぐる意見があった。しかし、全般的に否定的な記述は少なかった。

2013年度までは教室の静寂性をめぐるコメントが一定数あったが、2014年度のアンケート調査においては、否定的な評価が皆無と言ってよいほどの状態にある。教員側のコメントには静寂性に対する改善策がしばしば見られるだけに、これが一体何を意味しているのか慎重に検討してゆく必要、それも全学部を見渡せる視座から検討してゆく必要がある。それだけ授業が全体的に改善されたのか、前記したごとく周りの私語に慣れてしまったのか、一時期にアンケート調査が集中することによる思考停止か、それとも目立つ批判を表現だって言うのを回避するのが現在の若者の気質なのか、現段階では判断が下せない。

6. 今後の改善に向けて

2013年度の学部総評で示された改善点、「授業時間外の自主的学習」について、2014年度には、準備学習など課題の提示といった授業方法の共有に努めた。しかし2時間未満と回答する学生が87.2%もあり、2012年度の89.6%、2013年度の87.9%と比べて微減と言うより、ほぼ横ばいの状況にある。また他の項目において「比較的強い相関」があるのは、「授業をきっかけに発展的な学習をした」(I4)であるが、ここからは、具体的な改善策が浮かび上がってこない。

そこで、まずはこの問題の対策ではなく理由・原因をめぐって従来指摘されてきたことに目を向けてみる。それは、①自主的な学習をおこなう時間が、経済的事情によりアルバイトに割かれてしまうため、あるいは②サークル活動や交友関係に力を注いだ結果、学習時間が減ってしまう、こうした理由・原因である。しかしこれがどこまで「自主的な学習の時間」と相関しているかは、データがない状況にあるので、今後のアンケート項目として設置し、相関係数を見るといったことが求められる。

しかし自主的学習時間の少なさに関して、こうした授業外の事柄にすべて帰因させる訳にはゆかない。これまでとは異なった対策、すなわち手法が求められていることも確かである。

そうした視点から今回の自由記述欄を読むと、教員と学生との双方向性、そしてそれ以上に学生同士のディスカッション——と言うより、周りがどのような思い、考えを持っているかを確認し合う場——が、講義への参加度を高め、それを契機として事前事後学習へのモチベーションを高めてゆく可能性が浮かんでくる。それゆえ今後、そうすることが可能な講義からワークショップ形式の技法を導入し、また教員間で知見を共有することで、学部全体の講義への参加度を高める「文化」「風潮」を形成してゆくといった試みも重要であると思われる。

4-10 現代心理学部

1. 科目選定方針とねらい

現代心理学部では、以下の方針により授業評価アンケート実施対象科目を選定した。

- (1) 学部専任教員が担当する「学部共通選択科目（旧カリ「総合展開科目）」全科目
- (2) 学部専任教員が担当する「初年次教育科目」
- (3) 学部専任教員が担当する「講義科目」及び「共通シラバスにより展開される一部の科目」

なお、「演習科目」「実験科目」「集中科目」及び「複数教員担当科目」は、原則として実施対象としない、とした。また、例外として、実施対象とする科目を以下にあげる。

a. 「社会調査概論」及び「社会調査設計法」（助教担当科目）

2013年度新設の資格関連科目。学生意見を聴取したいため、「学部専任教員」の例外として実施する。

b. 「キャリアと心理学」（兼任担当科目）

2014年度新設のキャリア支援科目。学生意見を聴取したいため、「学部専任教員」の例外として実施する。

c. 「現代心理学入門」（複数教員担当科目）

「(2) 初年次教育科目」として全員必修である。「複数教員担当科目」であるが、実施対象とする。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

今回の回答率は、57.12%で、前年度から少し下がっており、大学全体の平均よりも低い値となったが、6割近い回答率であり、データとしての信頼度はこれまで通り確保されていると思われる。学部における傾向を見ると、「Ⅰ：授業への取り組み方」については、「Ⅰ1：授業への出席率」が90%以上と回答した学生が6割を越え、70-89%と回答した学生を加えると9割以上を占め、高い値であった。昨年同様、授業への積極的な参加度は、6割以上の学生が「Ⅰ2：授業に積極的に参加した」の設問に対し「大いにそう思う」、「そう思う」と回答したことからも、意欲的に授業に参加していると考えられる。しかし、「Ⅰ3：授業への準備」、「Ⅰ4：その後の学習の展開」に関しては昨年に引き続き低い値であり、より自主的な学びを導くために、授業外学習を促進する工夫が必要であると考えられる。学生の授業内容に対する評価は、これまでのように「Ⅱ8：映像視覚教材の使用」に高い効果が認められている。逆に、やはり「Ⅱ9：板書の仕方」についての評価は高くない。パワーポイントなどの使用が学生の理解度をあげていることも評価できるが、授業が予定調和的に進行することへの懸念もある。「Ⅲ：この授業から得ることができたもの」については、「Ⅲ1：自分にとって新しい考え方・発想」、「Ⅲ2：基本的な知識」について得点が高かったことから、授業を通じて、基礎的な知識および応用的・発展的な知見の両方を提供できていたと考えられる。その一方で、「Ⅲ3：自分で調べ、考える姿勢」の得点が低いことから、学生が自分なりの問題提起や思考方法を身につけるところまではいたってないことのあらわれのようにも思える。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

学生の回答に対して、担当教員はかなり緻密な所見を述べ、今後どのような授業を行えば、学生の学問的意欲を一層引き上げるかの手がかりにしていることが十分に伺えた。さらに、これらの所見から教員たちが、学生達が積極的に授業に参加できるような環境を作るように実践していることもわかる。ただ、知識を与えるだけではなく、それを糧に学生がどのような学習課題を自主的に克服し、研究テーマの設定にまで至っているのかが、まだ、了解できていないという意見もあり、今後の課題となるであろう。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

それぞれの教員が、学生からの授業の仕方への指摘にきちんと応答する姿勢が見られるのは、よかったと思う。些細な指摘でも教える方してみれば、気がついていないこともあり、このような記述による回答は、授業の向上のためには必要であると思われる。なにもかも、受講する側の要望を汲み取るとまではいかないまでも、参考になる情報データがあるのは心強いことではなかろうか。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

各教員とも学生からの指摘に真摯に向き合い、どう対処すれば良いかを具体的な方策として述べていた。授業は「生もの」であり、その時代によっても変化してゆくものであるから、板書をわかりやすく書くとか、パワポを使ってのビジュアル的なイメージの提示等、細かな工夫は今後とも、より積極的に行うべきであろう。

4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

授業評価アンケートの実施科目である、(3) 学部専任教員が担当する「講義科目」において「映像身体学科の理念を教えるのに必要な授業である」、という評価があり、この回答などは、学科にとって基礎教育のモデル授業としての指針となるのではないか。そのほか、学部全体における意見を見ても、チャレンジングで高度な授業内容でも、教え方によっては学生は知識欲をかきたてられることがよくわかる。また、特に多いのは映像資料を効果的に使用する授業への高い評価である。私語をやめるように指摘した授業に対して、肯定的な意見を書いている学生の意見も複数あり、教員には授業の環境を良くしようとする態度表明は必要なのであろう。

4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

昨年同様に、授業の環境面に対する不満が目についた。受講人数に対して教室が狭い・広い、室温設定が不適切、黒板・スクリーンが見にくい、静音環境が維持されていない、配付資料が見つらい等である。だが、この点は少しは改善されたのか、減少傾向にある印象がある。いくつか見られたのは、その授業の目的や評価基準のわからなさに対する不満である。

5. 今後の改善に向けて

昨年からの課題である、「自ら学習課題を見つけ、それを調べるような主体的・発展的な学習を導くこと」に関しては今年度もやはり、学生がそのような成果を得られていない結果に終わった。このことへの抜本的な解決策というのはなかなか簡単に提示できないが、やはり、日々地道に、教える側が学生と向き合い、学生の現状を正しく把握するより方策はないのかもしれない。学生の興味も日々変化しており、それにすべて合わせる必要もないが、教員各自の授業内容への柔軟な対応が求められるだろう。

それにしても、わかりやすく理解しやすい、そして参加しやすい授業は多くあるものの、それが自主的な研究課題への取り組みに至らないのはなぜか。このことを学部内でもっと積極的に議論する必要もあるように思われる。そのためにも、このような授業評価アンケートの結果は参考になるであろう。大学で学問をすることは、授業で「わかりやすさ」を提供することだけではないはずである。基礎知識の理解・修得の後には、この現実に山積する様々な問題に対して、自らの頭と身体で調査し考えること（実践的思考）が待っており、それが学問の最大の魅力でもある。独創的な問題提起、本質的な概念への思考。このような思考を学生に促すためにも、アンケートの結果を読み解きつつ、学生たちとともに考え議論する場をもっと大学内に創出する必要を強く感じる。これからも、学生への意見の聴取を実りあるものにしてゆきたい。

4-1-1 全学共通カリキュラム

1. 科目選定方針とねらい

2014年度全学共通カリキュラムでは、

- (1) 宗教・人権・大学に関わる「立教 A (FH)」科目
- (2) "学部提供科目"である「領域別 A (FF)」科目（「～学を読む」の領域別 B は除いた）
- (3) 過去の一般教養を継承する色彩が強い「主題別 A」の 5 カテゴリーにおける科目（①人間の探究 (FA)、②社会への視点 (FB)、③芸術・文化への招待 (FC)、④心身への着目 (FD)、⑤自然の理解 (FE)）
- (4) 「総合自由科目」（10科目のみ）

において、1 教員 1 科目の方針のもと、授業評価アンケートを実施した。実施合計 295 科目、回答者数 26,023 人となった。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

1) 設置科目別平均値の全体的傾向と相関係数表

2013年度の全カリ平均値と比較して、2014年度の数値は横這いか下がっている傾向があったが、学生の「授業への取り組み方 (I)」に関する項目は数値が改善していた。出席率が上がったことにより、「授業の教室の大きさ (V1)」「受講者数 (V2)」「環境設備 (V3)」の授業環境に対する不満が増え、学生の満足度等を下げているのかもしれない。また、教員側が板書や準備等について工夫を凝らし、基本的な専門知識を習得させているものの、それらの工夫が満足度等の数値の改善に結びついていないのかもしれない。例えば、数値が改善している項目の中で、「板書が適切 (II7)」(すなわち、教員側の工夫で改善できる項目)と、「IIIこの授業から得ることができたもの」及び「IV総合的にみて、この授業は…」との相関係数は概ね 0.5~0.6 程であった。当然相関関係は見受けられるものの、強い相関というほどでもない。学生に「基本的な専門知識 (III2)」が身につくよう、教員が頑張っても、「授業から得ることができたもの (III)」や「満足度等 (IV)」の項目がさほど上がらないのだとすると、やや手詰まり感がある。

2) 授業規模別平均値の特徴と相関係数表

必ずしも授業規模が小さいほど数値が良いわけではない。「この授業の進め方は… (II)」 「この授業から得ることができたもの (III)」 「総合的にみて、この授業は… (IV)」の 50名以下規模の数値は、概ね 51~100名及び 100~150名規模のものより良い傾向にある。しかし、151名以上規模の数値も、概ね 51~100名及び 100~150名規模のものより良い傾向にある。原則として TA・SA がつくのは 150名以上規模の場合であるため、151名以上規模の講義では TA・SA の活躍もあって数値が良くなっている可能性がある。一方で、TA・SA のつかない 51~150名規模のクラスでは、苦戦が強いられているのかもしれない。もっとも、51~100名規模と 101~150名規模との比較において前者が良いという確実な傾向は見出されないため、51~150名規模においては授業規模と学生の満足度等との間の関係は小さいのかもしれない。

授業規模別の相関係数は不明であるが、授業規模が小さいほど顕著に「静肅性 (II5)」が高い傾向がある (50名以下: 4.53、51~100名: 4.18、101~150名: 3.99、151名以上:

3.80) ため、「静肅性 (Ⅱ5)」とその他の数値との相関係数に着目することが、授業規模別の相関を間接的に観察することになるかもしれないと推測した。しかし、「静肅性 (Ⅱ5)」と「この授業から得ることができたもの (Ⅲ)」の相関係数は0.3以下、「静肅性 (Ⅱ5)」と「総合的にみて、この授業は… (Ⅳ)」との相関係数は0.3~0.35であり、相関関係があまりないことが推察される。もっとも、かつてと比べると静肅性が保たれやすくなった(それでも講義系を中心にまだまだ静肅性が保たれていない授業もあるようだが)ので、満足度等との相関係数が低いという可能性はある。

3) 学年別平均値の特徴

「出席率 (Ⅰ1)」は年次が低いほど顕著に高い傾向にある(1年次 93.25、2年次 91.86、3年次 90.56、4年次 86.10)。一方で、「授業以外学習時間 (Ⅰ6)」については4年次が最も高く、さらに「この授業の進め方は… (Ⅱ)」 「この授業から得ることができたもの (Ⅲ)」 「総合的にみて、この授業は… (Ⅳ)」の何れについても4年次が最も高い数値をつける傾向が見て取れる。1年次生はとりあえず出席はしてみるものの、大学での受講に馴染んでいないため、教員の講義を十分に吸収し、教員の良し悪し等を評価する十分な能力が育っていない、ということであるのかもしれない。他方、4年次生は、大学での受講に習熟しているばかりでなく、おそらくは出席する講義を厳選し単位修得への意識を高く持っているために、軒並み高い数値をつけているものと推測される。このことは2013年度と同様の傾向といえる。

学年別の相関係数ではないが、相関係数表の中で「出席率 (Ⅰ1)」とその他の数値との相関係数を見るに、「積極的参加 (Ⅰ2)」以外との相関係数は軒並み0.2以下とかなり低い。出席率重視に教育的効果があるのか、疑問を抱かざるをえない。

3. 各科目群・カテゴリの総評

3-1 立教科目群

1) 立教 A (FH)

「立教 A (FH)」は全カリ総合の諸科目群の中でも、受講者の勉学意欲を最も刺激しにくい分野である。そのため、各平均値のほとんどが諸科目群中で、最下位ないし下から2番目である。しかし、2013年度アンケート結果に比べて、2014年度は「基本的な専門知識 (Ⅲ2)」や「自分で調べ、考える姿勢 (Ⅲ3)」の数値が改善している。これは、先生方が学生のモチベーションを上げるべく工夫を凝らしてこられた成果であろう。かなりの多人数にも拘らず、学生自らがテーマを選び、グループ・ディスカッションを実施しているケースなどもあり、編成する側として本当に頭が下がる思いである。ただし、質問項目中の「総合的にみて、この授業は (Ⅳ)」のところは4項目とも最下位なので、問題は根本的には解決していない。このカテゴリが扱う「宗教」「人権」「大学」のテーマは、2016年度から「学びの精神」に引き継がれることになる。「学びの精神」は多くが1年次春学期に履修するため、より授業での工夫が必要になるだろう。「宗教」「人権」「大学」の各テーマの中では、「人権」が比較的好成績であるので、対策をたてる際のヒントになるであろう。また、「映像視覚教材の使用が効果的だった (Ⅱ8)」の項目の数値が低いのは、利用可能な設備についての先生方への周知が不十分な面もあると思われ、編成側としては反省材料である。さ

らに、受講者の出席率が最近上昇傾向にあり、その結果教室が狭すぎたり、スクリーンが見えにくかったりという問題が、今まで以上に顕在化してきているように見える（「この授業の受講者数は適切だった（V2）」「十分な静粛性が保たれた（II5）」いずれも最下位）。この点は放置できないので、何らかの対策を講じていく必要がある。

3-2 領域別科目群

1) 領域別 A (FF)

「領域別 A」は、2012 年から始まった科目群で、科目を提供する学部の所属学生は履修不可、という形式で運営されている。科目数は 58 コマで、他科目と比較してみるとアンケート回答者が割と多い科目である。集計データから際立った傾向はそれほど見られなかったものの、「授業の十分な準備（I3）」や「授業後の発展的展開（I4）」等に関しては他科目よりも低い結果がでていた。専門外の科目であるために、予習復習が難しいと感じている学生が多いのかもしれない。また各質問の相関関係数表をみると、「わかりやすい授業内容であった（IV1）」ために、学問的興味をかきたてられ（IV3）、授業内容に満足している（IV4）学生が多かった。

これに対して、教員が記載する所見票の中には、「専門的で難しいという意見の一方で、最先端の話が少ないという意見があった」という記述や、「基礎をある程度理解している学生には物足りなかったようだ」などの意見があり、習得度の異なる学生への対応や、基本的部分と専門部分の比率を考えるなどで苦労していることが読み取れる。中には、講義の途中でレベルを組み直したり、コーラスやリアクションメールを利用した双方向の授業を実施したりと、独自に工夫している授業もあった。また履修者数が多いわりには教室が狭い、スクリーンが見えにくいなどの環境面での課題も聞かれた。

2016 年度のカリキュラム改革を見据えて、このように専門的な科目を教養的な科目としてどのように教えていくか、という難しい課題の検討が今後も求められているといえよう。

3-3 主題別科目群

1) 主題別 A

①人間の探究 (FA)

2013 年度、「人間の探究」の授業の進め方に関する設問群（II2～9）で、全カリ平均の評点を下回る結果が出ていたが、2014 年度は大幅に改善され、「板書のしかたが適切だった（II7）」を除いて、全カリ平均と同じ、もしくはそれを上回る結果となった。とくに「各回の授業のねらいが明確であった（II3）」という設問でも、全カリ平均を上回っている。各回の授業の分量やねらいを各教員がより適切に準備して授業に臨んだことが、こうした結果を導いたものと考えられ、各教員の努力を高く評価したい。2013 年度の反省を踏まえ、改善に向けてのさまざまな努力が実ったものと思われる。

ただし、「聞きやすい話し方だった（II1）」については、全カリ平均と同じで、必ずしも他の科目と比較して高評価とはいえない。さらにこれと連動して、「わかりやすい授業だった（IV1）」の評点も全カリ平均と同じである。すなわち、「この授業へのあなたの取り組みについて（I）」、「この授業の進め方（II）」、「この授業から得ることができたもの（III）」のそれぞれの項目では、多くの場合は全カリ平均を上回る評点がでているにも関わらず、

総合的な評価としては、全カリ平均にとどまっているのであり、その原因は、「聞きやすい話し方だった（Ⅱ1）」、「板書のしかたが適切だった（Ⅱ7）」の評価の低さに求められるのではないだろうか。したがって、今後もよりわかりやすい授業に向けて、話し方や板書のしかたを中心に、改善がなお必要であろう。

また「教室の静粛性（Ⅱ5）」については、科目によっては、受講者数が100名前後でも静粛性が維持されていない科目も散見され、改善が望まれる。とはいえ評点の平均値は全カリ平均と同じであり、また受講者数200名以下の科目の多くでおおむね静粛性が保たれているとの結果となっている。それに比して300名前後の科目は、静粛性の維持という点で不十分であることが所見票から確認できるので、私語を止めない学生を退出させる措置をとるなど、学生に対して各教員が毅然とした態度で臨むことが今後も求められよう。

②社会への視点（FB）

2013年度の総評に、「この授業へのあなたの取り組み方について（Ⅰ）」「この授業の進め方は（Ⅱ）」「この授業から得ることができたもの（Ⅲ）」「総合的にみて、この授業は（Ⅳ）」は編成側でコントロールできない項目である。「学部等による設問（Ⅴ）」の教室の大きさ（Ⅴ1）、受講者数（Ⅴ2）、環境設備（Ⅴ3）だけが全カリとしてコントロールできる対象なので、今後も注視すると書いた。Ⅴの設問については数値が改善しており、学生にとっての授業環境は少し良くなったと思われる。しかし、Ⅰ～Ⅳについても2013年度の数値と比較したところ、若干数値が下がった傾向が見られる。環境は良くなったが満足度等は少し悪くなった可能性がある。

教員個々の所見票の記述を通覧するに、概ね高評価をいただけているとの記述が多く、また、教員が周到に準備等をされたこともうかがえる。一方で、言語道断にも私語があった（果てはゲームしている学生もいたらしい）など、学生の意識の低さが推測される内容もある（もっともそれでもアンケート所見票を書いている先生方は自らの指導不足と書いておられる傾向が目立つが）。「社会への視点（FB）」では200人超の大人数科目となることが珍しくないため、個々の教員の帰責事由とはいいがたく、筆記試験厳格化などシステムの改革でないと改善は難しいように思われ、その点で、「社会への視点（FB）」に限らず、2016年度から実施となる「学びの精神」におけるシステム改革の成果が期待される。

③芸術・文化への招待（FC）

「芸術・文化への招待（FC）」は、各設問項目において、2013年度はおおむね全カリ平均を上回る評点を獲得したが、2014年度は授業への取り組み方に関する設問（Ⅰ）を除いて、ほぼすべてで全カリ平均を下回る結果となった。このことは非常に残念である。2013年度は「授業全体を通じての出席率（Ⅰ1）」や「この授業に積極的に参加した（Ⅰ2）」などで全カリ平均より評点が低かったが、2014年度はこうした点は改善され、学生の授業への取り組みに積極性が感じられるようになった。しかしそれと反比例するかのようになり、「わかりやすい授業だった（Ⅳ1）」の評点が、全カリ科目の中でもかなり低い評価になっている。

この科目群は、芸術・文化・歴史を学ぶことの意義やそうした学問への入門案内という性格を持っているため、どの科目でも受講者数が多くなりがちである。抽選登録も採用されているが、教室が学生で一杯となる場合が多い。そのため、「教室の大きさ（Ⅴ1）」や「受

講者数の適切さ (V2)」などでは評点が低くならざるを得ないが、その割には「教室での静粛性 (II5)」は維持されており、所見票からも、各教員が学生の私語などに細かく対応したことが読み取れる。こうした各教員の努力は高く評価したい。

「プリント利用 (II6)」や「板書のしかた (II7)」の評点が低いですが、これらも所見票を確認すると、視覚教材 (パワーポイントなど) を多用するなど、教員による工夫がなされている故である。板書からどのようにノートをとるかなど、細かな指導が施されている例もみられるので、評点の低さをそのまま授業の不十分さと解釈することはできない。ただ「聞きやすい話し方かどうか (II1)」、あるいは「授業内容の分量 (II2)」や「ねらい (II3)」が適切かどうか、また、「授業内容が明確かどうか (II4)」について、すべて全カリ平均を下回る評点となっているのは、改善の余地があろう。専門的な内容を取り入れ、現代的課題や学問的な興味をかきたてるような内容でありながら、各学問の入門・案内となるように、各教員が努力していることは所見票からうかがえるので、それらが一層の実を結ぶように、講義のなかで学生を学問に「招待」するような道筋をこれからも工夫し、学生による理解を深めていくことが求められよう。

④心身への着目 (FD)

心理学、スポーツ科学、ウェルネス科学、医学の各分野から構成されている「心身への着目」は27科目で、今回実施されたアンケートの回答者数は3,860名であり、他の全カリ主題別A科目と同様に、1年次、2年次生の割合が多かった。担当教員の取り組みを評価する、「この授業の進め方は (II)」、「総合的に見て、この授業は (IV)」に関する項目を見ると、少人数科目が多い総合自由科目を除き、他のカテゴリの科目に比較して、ほとんどの評価項目で最も高い数値を示していた。このことは「心身への着目 (FD)」の科目担当教員の創意工夫と真摯な努力による取り組みの結果である事以外になく、高く評価されるべきことであろう。一方で、課題であろうと考えられる項目は、「この授業へのあなたの取り組みについて (I)」の中の「この授業に関して、授業時以外に学習した時間 (I6)」が0.66という数値で逆に他のカテゴリと比較して、最も短いという結果であったことである。シラバスでは、必ず課題について記入するようになっていることもあり、全カリ科目全体が各学部科目よりも短い傾向にあるなかで、この0.66は少ないと思われる。この点については今後、担当教員と情報を共有して改善を期待したい。

大人数科目が多い傾向があるこのカテゴリは、以前から静粛性に関して評価が低く課題であったが、その問題も改善されてきている。今後は、授業時以外の学習に関連する、自分で調べ、考える姿勢などが身につくように、CHORUSなどを利用して課題を出すなどの工夫が必要になると考える。

⑤自然の理解 (FE)

「自然の理解 (FE)」における各設問項目の評点は、全カリ平均と比較するとほぼ全ての項目で上回っている。特に、「板書の仕方が適切だった (II7)」「映像視覚教材の使用が効果的だった (II8)」「教員は授業の準備を周到に行っていた (II9)」の項目の評点が高く、結果として「自分で調べ、考える姿勢 (III3)」「学問的興味をかきたてられた (IV3)」「この授業を受けて満足した (IV4)」という項目が高い評点を得たとみることができる。実際、

教員所見でもスライドや配布物、動画等の資料を用意し、学生の興味を引く工夫をしていたとの記述がよく見られ、各教員の努力の成果が現れているものと理解できる。また 2013 年度のアンケートと比較しても各項目の評点はほぼ全ての項目で上回っており、全体として順調にカリキュラムの実施が行われていると判断できる。しかし、「授業全体を通じての出席率（I1）」「この授業に積極的に参加した（I2）」の項目が全カリ平均を下回っており、積極性に関する点に問題があるように考えられる。このことは教員の授業準備の良さと相反している可能性がある。今後は理解しやすさを保ちつつ学生の自主的学習を促す方策を模索していく必要がある。

3-4 総合自由科目

全カリ総合の平均値に比較すると、2013 年度に引き続き、各項目の値は抜群に高い。少人数科目であり、しかも学生の受講意識が高く、教員もそれにしっかり応えているということの表れであろう。しかし、ここでも一部のクラスに、教室規模・教室設備の問題が顕在化してきているのは無視できない。また、心配されていたように、英語で実施している上級クラスの受講者数が少なく、脱落者も多いのは気になるところである（脱落しなかった者の満足度は非常に高いのであるが）。ネイティブ・スピーカーにノーマル・スピードで難しい内容を話されたら、TOEIC 高得点者でもついていくのは困難であろう。補習用の教材を準備するなど、授業運営上、何らかの工夫が求められよう。

4. 今後の改善に向けて

2013 年度に当欄には、授業回数の確保が強く要請されている中でアンケートは 2~3 年度に 1 度の実施でもよいのではないかとの意見があったと記されていた。2014 年度においては未対応であり、今後も引き続きアンケート実施頻度について検討されるべきであろう。また、「静粛性（II5）」は改善していないが、2. 1) で前述したように、「出席率（I1）」の改善と関連している可能性がある。

この他に、2014 年度の当欄の分析から、2015 年度に向けて課題として発信すべきことは、直ちには見出しがたい。なぜなら、既に教員側の多くは講義において相当の工夫を凝らしていることが平均値及びアンケート所見票の個々の教員の記載から見受けられるものの、前述したように、教員が頑張っただけで学生に知識等を身に付けさせることには成功しても満足度等（III及びIV）がさほど上がらないのだとすると、手詰まり感が見受けられるためである。

2016 年度以降は「学びの精神」「多彩な学び」へ編成し直すこと、及び、「学びの精神」に多くの資源を投入するという方針であることから、資源投入が教育効果をもたらすのかの分析が待たれる。また、「出席率（I1）」と他の数値との相関係数が低いと前述したことに鑑みて、「学びの精神」における出席率の重視が教育効果をもたらすのかの分析も待たれる。また、授業評価アンケートでは検証する術がないものの、「学びの精神」における筆記試験の重視が教育効果をもたらすかについても（おそらくはアンケート所見票の個々の教員の記載から）考察すべきものと思われる。

4-12 学校・社会教育講座

1. 科目選定の方針とねらい

教職課程は毎年度「講義科目 1 教員 1 科目」を原則として実施している。他の課程は重点的科目を絞って実施し、数年で全科目が該当するように計画している。なお、履修者が 5 名以下の科目については各課程の判断によっている。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

学校・社会教育講座の調査対象科目の履修者数は 3,164 名、回答者数は 2,443 名であり、回答率は 77.21%となっている。「授業全体を通じての出席率」(平均値 94.43) から予想される回答率で、いずれの率も昨年度を若干上回っている。

設問項目別平均値を見るならば、全項目昨年度を上回っており、全体として概ね 4 以上の評価で、4 以下の評価は例外的と言っても過言ではない。3.5 以上で 4 を下回るものをあげると、低評価の順に、I 3 (履修にあたっての準備)、I 5 (シラバスは役立ったか)、III 3 (自分で調べ考える姿勢)、II 7 (板書) である。II 7 は 3.94 であり、III 3 を除けば、II (進め方)、III (得ることができたもの)、IV (総合評価) はほぼ 4 を上回る高評価で、評価対象となった科目の担当者たちは十分な努力をしている、と見ることができる。

3.5 以下の低評価項目はわずかに二つ、いずれも I (取り組み方) で、I 4 (発展的勉強)、I 6 (授業時間以外の学習時間) の低評価の常連的項目である。後者は昨年度 (0.83) を微妙に上回ったが (0.88)、この項目については、劇薬を考えるべきではなく、III 3、I 4 を促す工夫を地道に行っていくしかないのではないかと、思われる。

授業規模別平均値では、50 名以下の規模の方が、51~100 名の規模より平均値が高いのはあたりまえの結果であるが、その差はほとんどの項目で微妙な程度であり、中には II 1 (聞きやすい話し方)、II 2 (授業内容量) のようにわずかながら後の方が高い項目もあった。II 5 (静粛性) については、4.57 (前者) と 4.27 (後者) と有意な差があり、いずれも高評価で問題とするほどではないかもしれないが、51~100 名の規模で私語が増大する可能性が窺える。もっとも、今回のアンケート実施科目では、101 名以上の規模の該当科目が少なすぎてデータがなかったため、規模別に比較することの意味はほとんどないとも言える。

学年別延べ回答者数では、4 年生の回答者が際立って少ない (58 名) が、これは昨年度も記したように、学校・社会教育講座では学年が進むに従って、実習と結びつく演習的科目と実習科目そのものの履修が中心となり、それらの科目が対象科目から除外されているためである。学年別平均値では、3 年生、4 年生で、出席率を除くと、全体として 1 年生、2 年生よりも平均値が高くなっていることが興味深い結果である。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

所見を寄せた教員の多くが、学生の熱心さ、積極性に感謝する旨を記しており、I 6 (授業時以外の学習時間) の結果に、もう少し発展的な課題を出す、参考図書の解説を詳しくするなど、よりいっそうの工夫をすると真摯に表明している。先にも記したように、この項目については、こうした地道な取り組みに待つほかはないものと考えられるが、中には課題を提示しても取り組まない学生にどう対応するべきか、評価に迷ったら不可にするべ

きか、苦悩を記す教員もあった。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

配付資料、映像の活用など教材の工夫が、それぞれの科目で行われている様子が窺われる。また、グループワーク、ディスカッションなどの参加型授業や、リアクションペーパーを用いた双方向型の授業が好評であり、教員自身はその重要性を再認識したことが窺われる。一方、遅刻者の扱いや私語への対応について、学生の中には不満がある様子を、何人かの教員が記していた。個々の教員の努力が重要なことは言うまでもないが、学生の受講態度については、全学的な情報共有と対応策が求められるのではないだろうか。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

板書やパワーポイント、配布レジユメのバランス、効果的な使用についてなど、今後も改善を続けていきたいと真摯に記す教員が多かった。100名前後の授業規模でも、可能な限り、積極的に学生同士の議論を取り入れたい、と効果を実感しながら記す教員もあった。

4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

繰り返しになるが、参加型、双方向型への学生の評価は高く、教員としてもやりがいを感じている様子が窺われた。

4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

同じく繰り返しになるが、遅刻者の扱い、私語への対応について、学生の中には不満がある様子が窺われた。また、ごく一部の評価の中に、近年では少なくなったかと思われた、誹謗中傷を目的としているとしか考えられない記述を指摘する教員もあった。アンケートの目的とモラルの徹底が望まれる。

5. 今後の改善に向けて

既述のように、I4（発展的勉強）を促し、I6（授業時間以外の学習時間）を徐々にでも高スコアにしていくべく、何よりも双方向型の授業を重視して、学生の参加度をいっそう高め、配布物などの基本的な道具立てを改良し、発展的な課題を理解し取り組めるよう、地道で真摯な努力を続けていく。それ以外に、個々の教員および組織体にできることはないのではないか、と考える。

5. 2014 年度のまとめと今後の展望

2014 年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会
委員長 神橋 一彦

2014 年度は、2009 年度に教育改革推進会議において策定された「基本方針」（中期的な実施計画）に基づき、実施科目の選定については、各学部等の必要に応じて選定する方針のもと行われた。授業評価アンケートは、本学における教育インフラの重要な一部を構成するものであるところ、かかる事業が今年度も無事に実施され、報告書の作成に至ったことにつき、関係各位のご尽力、ご協力に対し、ここに衷心より感謝の意を表するものである。

2014 年度の 1 年間に、「学生による授業評価アンケート」をめぐる取り組みとして特記すべき事項を挙げれば、下記の通りである。

(1) アンケートの実施については、①実施科目数は、春学期 611 科目、秋学期 506、科目、合計 1,117 科目で全学の実施率（実施科目数／実施予定科目数）は 96.87% (1,117/1,153) であった。

(2) 2015 年度以降の授業評価アンケートの実施に関して、①英語による OMR 用紙の導入、および②2015 年度から 4 半期（クォーター）制の導入にあわせ、それに対応した授業評価アンケートの実施も行うことを決定した。

また、授業評価アンケートを活用した、「教育活動表彰制度」の創設が決定されたことを受け（2014 年 7 月 17 日、部長会）、同制度の前提となる制度設計および授業評価アンケートの活用方法について検討を進めている。

各学部の総評をみると、昨年度に引き続き、当該授業に関連して授業時以外に学習した時間が少ないことや、授業自体に対する満足度は低くないにもかかわらず、学生が授業をきっかけにして発展的な勉強をすることについては消極的であるという指摘が多くみられる。また回答する学生の側にも、授業参加の積極性を授業への出席率と同義にとらえているのではないかと、授業に出席しただけで満足している状況がみられるようである。その意味で、単に授業を「受けっぱなし」にしないための工夫が望まれるところである。

授業の進め方については、CHORUS や Blackboard の活用が成果をあげているほか、授業の補助手段については、従来からの板書・資料配布から映像メディア利用（パワー・ポイントなど）への変化が見てとれる。このような映像メディアの利用については、最近の学生はそのような手段に慣れていることがあるものの、パワポの進度に学生が付いていけない、その意味で授業における教師と学生との間の「間合い」の問題が窺える（これは板書も同じである）。あわせて、かかる映像メディアの利用により、授業が予定調和的に進むことへの危惧もみられる。さらに、最近では、板書をスマートフォン等で撮影する学生がいることも記載されているが、改めて受講の際のモラルやマナーとは何かについて考えさせるものである。学部によっては、学生の要望が極めて多様、多角化している状況がうかがえるが、いずれ学生は大学を卒業して社会に出ていく。社会の厳しい現実を考えたときに、過度のサービスが教育として妥当かどうか、学生の甘えを助長することにならないか、そろそろそういった観点から考えることも必要なときがきているのかも知れない。関

連して、教育活動表彰制度についても、教育の真の向上に資するべく、表彰の観点について、慎重な考慮検討が必要であろう。また、教育環境については、私語対策の必要が引き続き述べられている。なかなか出口の見えない問題であるが、引き続き検討課題である。

以上、今年度の授業評価アンケートにつき総括的なコメントを行ったが、今後ともアンケート結果の分析が多角的視点から行われるとともに、引き続きよりよい授業に向けた学部等ならびに各教員の努力を喚起、促進するものとなるよう期待する次第である。

6. 集計データ（資料編）

6-1 回答者数・回答率

延べ回答者数 80,222 名

表1 学部等別履修者数と回答者数、および回答率

科目開設学部等	履修者数	回答者数	回答率
文	9,758	6,777	69.45
経済	3,514	2,617	74.47
理	7,378	4,806	65.14
社会	18,480	10,375	56.14
法	2,963	1,392	46.98
経営	13,928	8,103	58.18
異文化コミュニケーション	392	356	90.82
観光	11,295	7,250	64.19
コミュニティ福祉	11,552	7,423	64.26
現代心理	4,652	2,657	57.12
全学共通カリキュラム	42,115	26,023	61.79
学校・社会教育講座	3,164	2,443	77.21
合計	129,191	80,222	62.10

注1) 履修者数・回答者数は、アンケート実施科目の延べ履修者、回答者

注2) 学部等は、アンケート実施科目の開設学部により分類した

表2 学部等別学年別の回答者数

科目開設学部等	1年	2年	3年	4年	不明	合計
文	2,539	2,298	1,231	553	156	6,777
経済	2,135	235	109	87	51	2,617
理	1,376	1,735	1,346	260	89	4,806
社会	3,091	3,342	2,741	980	221	10,375
法	321	233	521	305	12	1,392
経営	2,298	2,190	2,161	1,104	350	8,103
異文化コミュニケーション	239	99	4	3	11	356
観光	1,552	2,494	2,261	821	122	7,250
コミュニティ福祉	1,683	2,544	2,260	800	136	7,423
現代心理	913	855	615	239	35	2,657
全学共通カリキュラム	9,682	8,009	5,235	2,440	657	26,023
学校・社会教育講座	847	883	589	58	66	2,443
合計	26,676	24,917	19,073	7,650	1,906	80,222

注1) 回答者数は延べ人数

注2) 学年は、当該学部等で実施したアンケートに回答した学生の学年を示す

注3) 学部等により実施科目の選定方針が異なるため、学年の偏りがある

6-2 学部等別平均値

表3 文学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 ^{*1}	6,764	92.62	12.31
I 2 この授業に積極的に参加した	6,759	3.94	0.95
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	6,752	3.39	1.03
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	6,751	3.29	1.11
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	6,720	3.60	1.02
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 ^{*2}	6,749	1.04	0.98
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	6,759	4.00	1.04
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	6,753	4.00	0.96
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	6,751	3.99	0.98
II 4 各回の授業内容は明確だった	6,740	4.03	0.96
II 5 十分な静粛性が保たれた	6,744	3.88	1.15
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	6,699	3.98	1.00
II 7 板書のしかたが適切だった	3,912	3.64	1.07
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	4,464	4.09	1.00
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	6,559	4.26	0.87
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	6,750	3.91	0.98
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	6,747	3.91	0.92
III 3 自分で調べ、考える姿勢	6,744	3.58	1.07
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	6,738	3.74	1.00
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	6,750	3.96	1.04
IV 2 授業全体の目標が明確だった	6,752	3.98	0.98
IV 3 学問的興味をかきたてられた	6,750	3.85	1.06
IV 4 この授業を受けて満足した	6,750	3.93	1.05
V 学部等による設問			
V 1 この授業の教室の大きさは適切だった	6,598	4.22	0.99
V 2 この授業の受講者数は適切だった	6,597	4.09	1.05

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) II 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表4 経済学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 ^{*1}	2,609	93.42	13.05
I 2 この授業に積極的に参加した	2,612	4.14	0.95
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	2,609	3.49	1.06
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	2,612	3.30	1.13
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	2,597	3.19	1.13
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 ^{*2}	2,608	1.18	1.02
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	2,609	4.01	1.02
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	2,610	3.91	1.03
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	2,611	4.02	0.93
II 4 各回の授業内容は明確だった	2,605	4.03	0.94
II 5 十分な静粛性が保たれた	2,607	3.83	1.07
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	2,585	3.92	0.99
II 7 板書のしかたが適切だった	1,697	3.68	1.09
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	1,620	3.91	1.02
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	2,518	4.22	0.88
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	2,609	3.69	0.98
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	2,608	3.91	0.89
III 3 自分で調べ、考える姿勢	2,607	3.63	0.99
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	2,601	3.64	0.97
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	2,604	3.97	1.00
IV 2 授業全体の目標が明確だった	2,605	4.01	0.93
IV 3 学問的興味をかきたてられた	2,605	3.68	1.03
IV 4 この授業を受けて満足した	2,602	3.86	0.99
V 学部等による設問			
V 1（全科目共通設問）教室の規模と設備は適切であった	2,193	4.30	0.84
V 2（基礎ゼミナール1）経済文献を読む力がついた	576	3.83	0.90
V 3（基礎ゼミナール1）レジュメやレポート作成の力がついた	575	4.14	0.81
V 4（情報処理系科目）表計算ソフト（Excel）の応用力が身についた	762	4.09	0.89
V 5（情報処理系科目）Power Point でプレゼンテーション資料を作成する力が身についた	763	3.88	1.00
V 6（情報処理系科目）WEB 上から経済資料・統計資料を入手する力が身についた	771	3.98	0.93

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) II 1は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I 6は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表5 理学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 _{*1}	4,790	93.72	13.32
I 2 この授業に積極的に参加した	4,787	4.05	0.97
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	4,788	3.39	1.03
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	4,783	3.32	1.07
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	4,761	3.39	1.05
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 _{*2}	4,776	1.19	0.98
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	4,786	3.82	1.08
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	4,785	3.76	1.06
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	4,780	3.85	1.02
II 4 各回の授業内容は明確だった	4,775	3.87	1.03
II 5 十分な静粛性が保たれた	4,772	4.04	1.02
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	4,754	3.80	1.06
II 7 板書のしかたが適切だった	3,776	3.63	1.17
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	2,952	3.83	1.08
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	4,646	4.13	0.92
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	4,774	3.73	0.97
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	4,771	3.86	0.93
III 3 自分で調べ、考える姿勢	4,771	3.61	1.00
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	4,767	3.51	1.03
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	4,771	3.68	1.12
IV 2 授業全体の目標が明確だった	4,769	3.82	1.02
IV 3 学問的興味をかきたてられた	4,767	3.64	1.09
IV 4 この授業を受けて満足した	4,769	3.68	1.08
V 学部等による設問			
V 1 シラバスに沿って授業が行われた	4,688	3.90	0.90
V 2 教員は質問・疑問に対し積極的に答えてくれた	4,677	3.97	0.94
V 3 (1年次春学期必修科目のみ)教員は高校までの授業スタイルとの違いを考慮して授業展開をしてくれた	671	3.52	1.12
V 4 (必修科目のみ)授業で困った際に、練習問題を解き合う等で学生同士が共同して解決策をとった	2,692	3.79	1.11

注1) 回答者数は延べ人数（II7, II8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) II1は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I6は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表6 社会学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 _{*1}	10,347	91.81	13.65
I 2 この授業に積極的に参加した	10,335	3.80	0.97
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	10,327	3.17	1.00
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	10,316	3.04	1.06
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	10,299	3.51	1.00
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 _{*2}	10,316	0.80	0.87
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	10,331	3.90	1.04
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	10,322	3.97	0.90
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	10,320	3.92	0.93
II 4 各回の授業内容は明確だった	10,308	3.94	0.94
II 5 十分な静粛性が保たれた	10,302	3.62	1.24
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	10,206	3.77	1.01
II 7 板書のしかたが適切だった	5,054	3.53	1.05
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	8,920	4.06	0.94
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	10,091	4.17	0.84
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	10,316	3.82	0.93
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	10,314	3.78	0.90
III 3 自分で調べ、考える姿勢	10,307	3.35	1.01
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	10,293	3.76	0.94
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	10,310	3.86	1.01
IV 2 授業全体の目標が明確だった	10,307	3.87	0.95
IV 3 学問的興味をかきたてられた	10,307	3.75	1.02
IV 4 この授業を受けて満足した	10,307	3.81	1.02

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表7 法学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 ^{*1}	1,391	86.38	19.65
I 2 この授業に積極的に参加した	1,390	3.73	1.07
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	1,388	3.05	1.04
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	1,390	3.01	1.11
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	1,387	3.53	1.06
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 ^{*2}	1,389	0.92	0.90
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	1,390	3.92	1.17
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	1,390	3.98	1.03
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	1,389	4.05	0.99
II 4 各回の授業内容は明確だった	1,387	4.05	1.00
II 5 十分な静粛性が保たれた	1,388	4.08	1.05
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	1,382	3.91	1.03
II 7 板書のしかたが適切だった	1,071	3.50	1.07
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	791	3.91	1.11
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	1,360	4.34	0.82
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	1,388	3.85	0.99
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	1,389	3.87	0.94
III 3 自分で調べ、考える姿勢	1,389	3.41	1.04
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	1,386	3.86	0.96
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	1,385	3.91	1.10
IV 2 授業全体の目標が明確だった	1,386	4.01	1.01
IV 3 学問的興味をかきたてられた	1,386	3.82	1.08
IV 4 この授業を受けて満足した	1,386	3.91	1.07

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表8 経営学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 _{*1}	8,076	92.59	13.44
I 2 この授業に積極的に参加した	8,066	3.99	0.94
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	8,059	3.53	1.01
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	8,057	3.43	1.08
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	8,033	3.52	1.06
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 _{*2}	8,045	1.08	1.03
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	8,064	4.03	1.02
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	8,059	4.02	0.94
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	8,058	4.06	0.93
II 4 各回の授業内容は明確だった	8,053	4.06	0.94
II 5 十分な静粛性が保たれた	8,044	3.97	1.04
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	7,970	3.92	1.02
II 7 板書のしかたが適切だった	3,945	3.73	1.07
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	7,358	4.09	0.96
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	7,882	4.26	0.85
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	8,045	3.95	0.93
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	8,046	4.02	0.87
III 3 自分で調べ、考える姿勢	8,045	3.68	1.01
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	8,031	3.89	0.95
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	8,043	4.01	0.99
IV 2 授業全体の目標が明確だった	8,039	4.04	0.95
IV 3 学問的興味をかきたてられた	8,032	3.91	1.01
IV 4 この授業を受けて満足した	8,030	3.99	0.99

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表9 異文化コミュニケーション学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 ^{*1}	355	97.18	7.74
I 2 この授業に積極的に参加した	354	4.39	0.73
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	355	3.98	0.85
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	355	3.75	1.00
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	353	3.50	1.09
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 ^{*2}	355	1.17	0.92
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	355	3.96	1.17
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	355	4.18	0.88
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	355	4.19	0.93
II 4 各回の授業内容は明確だった	355	4.19	0.92
II 5 十分な静粛性が保たれた	355	3.97	0.94
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	346	4.04	0.96
II 7 板書のしかたが適切だった	120	3.92	0.96
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	324	4.43	0.73
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	342	4.40	0.82
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	355	4.29	0.83
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	355	3.99	0.96
III 3 自分で調べ、考える姿勢	355	4.02	0.91
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	355	3.91	0.98
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	355	4.19	0.97
IV 2 授業全体の目標が明確だった	355	4.26	0.92
IV 3 学問的興味をかきたてられた	355	3.95	1.08
IV 4 この授業を受けて満足した	355	4.19	0.95

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表10 観光学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 _{*1}	7,239	90.15	13.98
I 2 この授業に積極的に参加した	7,240	3.92	0.91
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	7,229	3.28	1.00
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	7,222	3.20	1.06
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	7,196	3.71	0.94
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 _{*2}	7,217	0.78	0.89
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	7,234	4.08	0.99
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	7,236	4.11	0.90
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	7,235	4.10	0.90
II 4 各回の授業内容は明確だった	7,225	4.13	0.89
II 5 十分な静粛性が保たれた	7,219	4.12	0.95
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	7,172	4.05	0.94
II 7 板書のしかたが適切だった	3,794	3.75	1.01
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	6,512	4.22	0.86
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	7,072	4.36	0.76
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	7,227	3.99	0.91
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	7,228	3.98	0.87
III 3 自分で調べ、考える姿勢	7,228	3.55	1.00
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	7,221	3.85	0.94
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	7,225	4.04	0.95
IV 2 授業全体の目標が明確だった	7,225	4.07	0.91
IV 3 学問的興味をかきたてられた	7,223	3.91	0.99
IV 4 この授業を受けて満足した	7,221	4.01	0.96
V 学部等による設問			
V 1 この授業の教室の大きさは適切だった	7,124	4.30	0.88
V 2 この授業の受講者数は適切だった	7,123	4.26	0.86
V 3 この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった	7,112	4.31	0.81
V 4 わたしは、この授業を通じて、現代社会における観光の重要性を認識した	7,107	3.77	1.08
V 5 わたしは、この授業を通じて、観光関連の仕事に興味をおぼえた	7,101	3.56	1.16
V 6 わたしは、この授業を通じて、観光を学ぶことにより興味がわいた	7,095	3.72	1.12

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表 1 1 コミュニティ福祉学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 ^{*1}	7,405	90.06	14.18
I 2 この授業に積極的に参加した	7,406	3.91	0.92
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	7,396	3.35	1.00
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	7,397	3.23	1.05
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	7,366	3.69	0.94
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 ^{*2}	7,395	0.88	0.93
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	7,404	4.04	1.00
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	7,402	4.08	0.89
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	7,401	4.08	0.89
II 4 各回の授業内容は明確だった	7,396	4.09	0.89
II 5 十分な静粛性が保たれた	7,393	3.99	1.01
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	7,328	4.02	0.95
II 7 板書のしかたが適切だった	4,214	3.67	1.03
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	6,517	4.22	0.88
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	7,231	4.28	0.82
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	7,397	3.94	0.89
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	7,397	3.92	0.88
III 3 自分で調べ、考える姿勢	7,394	3.54	0.99
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	7,391	3.86	0.93
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	7,394	4.02	0.96
IV 2 授業全体の目標が明確だった	7,389	4.06	0.91
IV 3 学問的興味をかきたてられた	7,386	3.87	1.00
IV 4 この授業を受けて満足した	7,387	4.00	0.96

注 1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注 2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表 1 2 現代心理学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率* ₁	2,649	91.76	13.37
I 2 この授業に積極的に参加した	2,649	3.85	0.98
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	2,647	3.14	1.03
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	2,643	3.10	1.10
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	2,632	3.60	1.01
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* ₂	2,640	0.72	0.85
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	2,645	4.02	1.00
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	2,646	4.07	0.90
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	2,643	4.05	0.94
II 4 各回の授業内容は明確だった	2,643	4.07	0.92
II 5 十分な静粛性が保たれた	2,642	4.02	1.00
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	2,615	4.04	0.97
II 7 板書のしかたが適切だった	1,497	3.64	1.03
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	2,275	4.20	0.90
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	2,608	4.36	0.78
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	2,642	4.07	0.95
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	2,643	3.94	0.92
III 3 自分で調べ、考える姿勢	2,642	3.41	1.07
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	2,640	3.77	1.00
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	2,642	3.96	1.03
IV 2 授業全体の目標が明確だった	2,642	4.05	0.95
IV 3 学問的興味をかきたてられた	2,642	3.90	1.06
IV 4 この授業を受けて満足した	2,641	3.99	1.01
V 学部等による設問			
V 1 この授業の受講者数は適切だった	2,594	4.16	0.90
V 2 この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった	2,591	4.26	0.85
V 3 現代心理学部の教育研究設備に満足している	2,584	4.04	0.94

注 1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注 2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) II 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表13 全学共通カリキュラム

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率* ₁	25,959	91.57	13.49
I 2 この授業に積極的に参加した	25,939	3.92	0.95
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	25,916	3.23	1.05
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	25,901	3.12	1.12
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	25,796	3.64	1.02
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* ₂	25,884	0.77	0.92
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	25,941	4.09	0.98
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	25,943	4.10	0.92
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	25,927	4.08	0.93
II 4 各回の授業内容は明確だった	25,895	4.11	0.92
II 5 十分な静粛性が保たれた	25,890	3.99	1.05
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	25,682	3.96	1.01
II 7 板書のしかたが適切だった	12,960	3.66	1.09
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	23,616	4.25	0.91
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	25,355	4.34	0.81
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	25,915	3.95	0.95
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	25,906	3.87	0.93
III 3 自分で調べ、考える姿勢	25,899	3.42	1.05
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	25,870	3.79	0.98
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	25,893	4.04	0.99
IV 2 授業全体の目標が明確だった	25,890	4.05	0.94
IV 3 学問的興味をかきたてられた	25,889	3.90	1.03
IV 4 この授業を受けて満足した	25,888	3.99	1.00
V 学部等による設問			
V 1 この授業の教室の大きさは適切だった	23,894	4.04	1.08
V 2 この授業の受講者数は適切だった	23,829	4.02	1.01
V 3 この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった	23,785	4.10	0.96
V 4 この授業の登録方法（次の中から選んでマークしてください） ⑤1次抽選登録 ④2次抽選登録 ③科目コード登録 ②その他 ①覚えていない	—	—	—

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) II 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表 1 4 学校・社会教育講座

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率* ₁	2,437	94.43	10.06
I 2 この授業に積極的に参加した	2,436	4.11	0.88
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	2,435	3.52	0.98
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	2,429	3.42	1.04
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	2,422	3.68	0.99
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* ₂	2,432	0.88	0.89
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	2,436	4.37	0.86
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	2,435	4.28	0.84
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	2,432	4.29	0.84
II 4 各回の授業内容は明確だった	2,430	4.32	0.82
II 5 十分な静粛性が保たれた	2,426	4.35	0.87
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	2,409	4.28	0.86
II 7 板書のしかたが適切だった	1,771	3.94	0.97
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	1,708	4.30	0.86
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	2,370	4.44	0.77
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	2,431	4.17	0.87
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	2,429	4.12	0.84
III 3 自分で調べ、考える姿勢	2,430	3.72	1.00
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	2,429	4.03	0.90
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	2,428	4.32	0.85
IV 2 授業全体の目標が明確だった	2,427	4.27	0.87
IV 3 学問的興味をかきたてられた	2,430	4.02	1.00
IV 4 この授業を受けて満足した	2,429	4.20	0.93

注 1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注 2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

6-3 「グループ集計」科目一覧

表 1 5 経済学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	経済数学入門	春学期
2	経済数学入門	春学期

グループ2

No.	科目名	学期
1	情報処理入門	春学期
2	情報処理入門	春学期
3	情報処理入門	春学期
4	情報処理入門	春学期
5	情報処理入門	春学期
6	情報処理入門	春学期
7	情報処理入門	春学期
8	情報処理入門	春学期
9	情報処理入門	春学期
10	情報処理入門	春学期
11	情報処理入門	春学期

グループ3

No.	科目名	学期
1	経済情報処理A	春学期
2	経済情報処理A	春学期
3	政策情報処理A	春学期
4	財務情報処理A	春学期

グループ4

No.	科目名	学期
1	基礎ゼミナール1	春学期
2	基礎ゼミナール1	春学期
3	基礎ゼミナール1	春学期
4	基礎ゼミナール1	春学期
5	基礎ゼミナール1	春学期
6	基礎ゼミナール1	春学期
7	基礎ゼミナール1	春学期
8	基礎ゼミナール1	春学期
9	基礎ゼミナール1	春学期
10	基礎ゼミナール1	春学期
11	基礎ゼミナール1	春学期
12	基礎ゼミナール1	春学期
13	基礎ゼミナール1	春学期

グループ5

No.	科目名	学期
1	基礎ゼミナール1	春学期
2	基礎ゼミナール1	春学期
3	基礎ゼミナール1	春学期
4	基礎ゼミナール1	春学期
5	基礎ゼミナール1	春学期
6	基礎ゼミナール1	春学期
7	基礎ゼミナール1	春学期
8	基礎ゼミナール1	春学期
9	基礎ゼミナール1	春学期
10	基礎ゼミナール1	春学期
11	基礎ゼミナール1	春学期
12	基礎ゼミナール1	春学期
13	基礎ゼミナール1	春学期
14	基礎ゼミナール1	春学期
15	基礎ゼミナール1	春学期
16	基礎ゼミナール1	春学期

グループ6

No.	科目名	学期
1	基礎ゼミナール1	春学期
2	基礎ゼミナール1	春学期
3	基礎ゼミナール1	春学期
4	基礎ゼミナール1	春学期

グループ7

No.	科目名	学期
1	経済学	秋学期
2	経済学	秋学期
3	経済学	秋学期
4	経済学	秋学期
5	経済学	秋学期

グループ8

No.	科目名	学期
1	簿記	秋学期
2	簿記	秋学期
3	簿記	秋学期
4	簿記	秋学期
5	簿記	秋学期
6	簿記	秋学期
7	簿記	秋学期
8	簿記	秋学期
9	簿記	秋学期
10	簿記	秋学期

表 1 6 異文化コミュニケーション学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	Cultural Exchange	春学期
2	Cultural Exchange	春学期
3	Cultural Exchange	春学期
4	Cultural Exchange	春学期
5	Cultural Exchange	春学期
6	Cultural Exchange	春学期

表 17 コミュニティ福祉学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	ヒューマンサービス英語入門B	春学期
2	ウエルネス福祉論	春学期
3	現代キリスト教人間学	春学期
4	福祉文化論	春学期
5	情報処理3	春学期
6	家族社会学	春学期
7	セクソロジー	春学期
8	ライフサイクルの心理学	春学期
9	グリーフスタディ	春学期
10	社会福祉発達史1	春学期
11	リスクマネジメント論	春学期
12	公共哲学	春学期

グループ2

No.	科目名	学期
1	児童福祉論	春学期
2	福祉機器論	春学期
3	医学概論	春学期
4	社会福祉法制	春学期
5	公的扶助論	春学期
6	高齢者福祉論	春学期
7	地域福祉論1	春学期
8	福祉環境論	春学期
9	医療福祉論	春学期
10	精神保健福祉援助技術各論1	春学期
11	家族臨床心理学	春学期
12	社会福祉援助技術論2	春学期
13	福祉産業論	春学期
14	老年臨床心理学	春学期
15	精神保健学1	春学期

グループ3

No.	科目名	学期
1	家族政策	春学期
2	国際NGO論	春学期
3	社会政策	春学期
4	経営組織論	春学期
5	国際経済論	春学期
6	地方財政論	春学期
7	エスニシティ論	春学期
8	質的リサーチ	春学期
9	リサーチ方法論2	春学期
10	ソーシャルサポート論	春学期
11	社会問題の社会学	春学期
12	社会開発論	春学期
13	住宅政策	春学期
14	教育政策	春学期
15	自治体政策論	春学期
16	災害心理学	春学期
17	多文化社会論	春学期
18	NPO論	春学期

グループ4

No.	科目名	学期
1	生理学	春学期
2	ウエルネススポーツ医学	春学期
3	身体文化論	春学期
4	スポーツ政策	春学期
5	健康政策	春学期
6	運動・スポーツ栄養学	春学期
7	小児保健・精神保健	春学期
8	メンタルマネジメント	春学期
9	バイオメカニクス	春学期
10	公衆衛生学	春学期

グループ5

No.	科目名	学期
1	法学2	秋学期
2	心理学2	秋学期
3	社会教育施設論2	秋学期
4	社会教育計画2	秋学期

グループ6

No.	科目名	学期
1	情報処理2	秋学期
2	キャリア形成論1	秋学期
3	コミュニティ福祉とキリスト教	秋学期
4	社会調査法	秋学期
5	人権論	秋学期
6	いのちの倫理学	秋学期
7	老年学	秋学期
8	障害学入門	秋学期
9	日本の文化と思想	秋学期
10	家族心理学の基礎	秋学期
11	宗教人間学	秋学期

グループ7

No.	科目名	学期
1	家族福祉論	秋学期
2	発達障害論	秋学期
3	ソーシャルワーク論2	秋学期
4	心理学理論と心理的支援	秋学期
5	障害者福祉論	秋学期
6	精神医学2	秋学期
7	就労支援サービス	秋学期
8	障害幼児ソーシャルワーク論	秋学期
9	社会福祉援助技術論3	秋学期
10	社会保障論	秋学期
11	福祉マネジメント論	秋学期
12	福祉情報論	秋学期
13	リハビリテーション論	秋学期
14	福祉学特論	秋学期
15	精神保健学2	秋学期
16	精神保健福祉援助技術各論2	秋学期
17	精神科リハビリテーション学1	秋学期

グループ8

No.	科目名	学期
1	少子高齢社会論	秋学期
2	地方自治論	秋学期
3	政策学の基礎知識	秋学期
4	コミュニティと文化	秋学期
5	逸脱と紛争の修復	秋学期
6	余暇生活論	秋学期
7	リーダーシップ論	秋学期
8	生命倫理政策入門	秋学期
9	行政学	秋学期
10	雇用と福祉	秋学期
11	データ分析法	秋学期

グループ9

No.	科目名	学期
1	運動処方・療法	秋学期
2	運動生理学	秋学期
3	スポーツ科学総論	秋学期
4	アダプテッドスポーツ論	秋学期
5	スポーツコーチ学	秋学期
6	ストレングス・コンディショニング論	秋学期
7	コミュニティスポーツ論	秋学期
8	レクリエーション援助論	秋学期
9	障害者スポーツ論	秋学期
10	スポーツビジネス論	秋学期
11	スポーツマネジメント論	秋学期

大学教育開発・支援センター 教学 IR 部会 (2015 年 9 月現在)

部会長	原 田	久	(法学部、副総長)
	堀	耕 治	(現代心理学部長)
	井 川	充 雄	(教務部部長、社会学部)
	都 築	誉 史	(現代心理学部)
	林	英 明	(教務部全学共通カリキュラム事務室)
事務局	遠 藤	裕 子	(大学教育開発・支援センター)
	佐 藤	百 恵	(大学教育開発・支援センター)
	上 原	裕 輔	(大学教育開発・支援センター)

2014 年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

委員長	神 橋	一 彦	(教務部副部長、法学部)
事務局	今 田	晶 子	(大学教育開発・支援センター)
	佐 藤	百 恵	(大学教育開発・支援センター)
	上 原	裕 輔	(大学教育開発・支援センター)
	間 中	賢 治	(教務事務センター)
	梁 取	瞳	(新座キャンパス事務部教務課)

2014 年度「学生による授業評価アンケート」報告書

2015 年 9 月発行

編集 立教大学 2014 年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

発行 立教大学 大学教育開発・支援センター

〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1

TEL 03-3985-4624 FAX 03-3985-4615

<http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/>

e-mail cdshe@grp.rikkyo.ne.jp

